新制國語讀本

卷四

375.9
Sa19
資料室

41514
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
1887

昭和十三年一月二十一日

文部省檢定濟

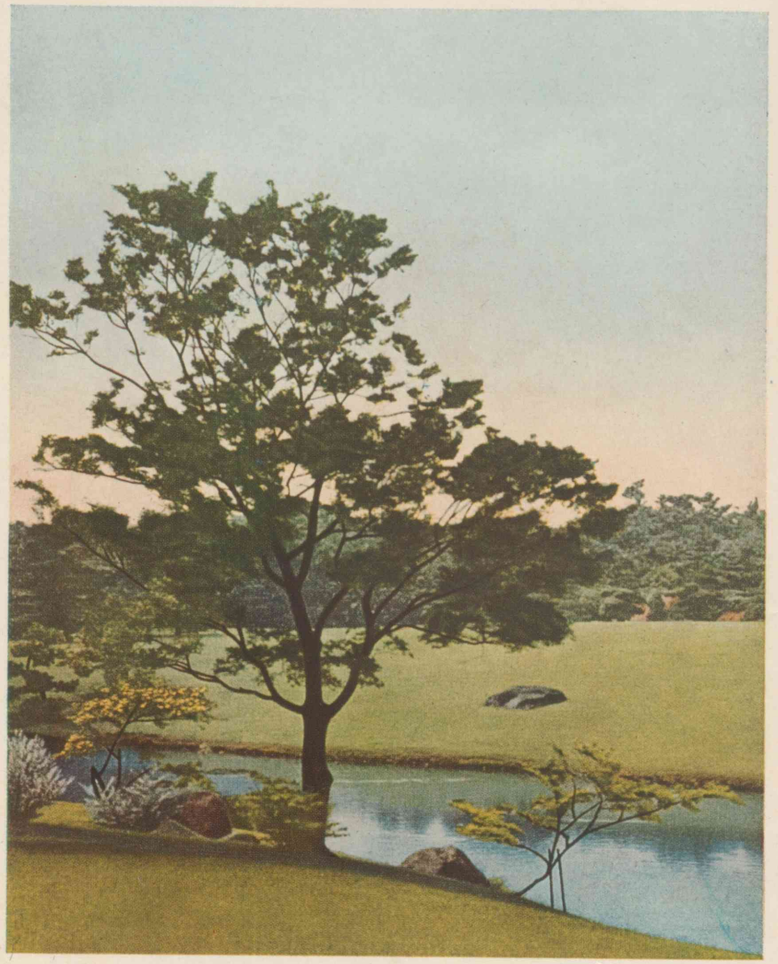
中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

新制國語讀本

湯川弘文社

資料室
375.9
Sa19



明治神宮　　神苑

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
40731
図書

新制國語讀本　卷四

目次

一　神域　溝口白羊　一
二　乃木將軍　櫻井忠溫　一六
三　文章道　島崎藤村　二七
四　松阪の一夜　編者　三四
五　社會精神　澁澤榮一　四二
六　絲瓜の棚　〔俳句〕　五〇

七 雁信 長塚節 一五二
一 秋涼
二 伊豆の旅 島木赤彦 一五四
八 膽力の錬磨 嘉納治五郎 一五六
九 七株松 落合直文 一六二
一〇 地圖を見ながら 深田久彌 一六六
一一 國際的標準 新渡戸稲造 一八〇
一二 山中鹿之助 大町桂月 一八七
一三 雪前雪後 幸田露伴 一九〇
一四 はやり詞 新村出 一九六

一五 言葉の力 金田一京助 一〇五
一六 日蓮上人の人格 高山樗牛 一一一
一七 我が文化の將來 田中寛一 一二六
一八 春を迎ふ 編者 一三三
一九 昭和日本 德富蘇峰 一三八

〔補習文〕

一 東海道の歌 編者 一四七
二 曾我兄弟 森鷗外 一五四

南京大學圖書之印

溝口白羊
名は駒造。文學者。大阪府の人。明治十四年生。
代々木の森
東京市澁谷區代々幡町に在る。

新制國語讀本 卷四

一 神域

溝口白羊

快美な色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度其處を通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

附錄
常用漢字表

或時は、無數の蟻の集團などが大きな餌を引くかのやうに、六七丈程もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ。さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對する樣な強い尊い懷しさに充たされた。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらないほど嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

流造
「ながれはふづくり」ともいふ。側面は破風造で棟から前の軒先まで、棟から後の軒先までより長くして、そりをもたせた造りかた。

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも竝んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今淸々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやら、すつかり見ちがへるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との領土。私は、はじめて完成した明治神宮の神苑に立つ

延人員　工事に使用した總人員を一日一人の割合に計算すること。

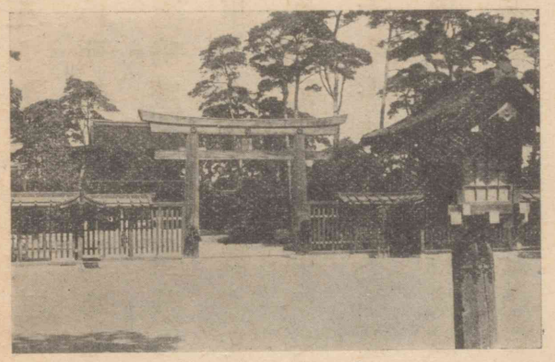
尺〆　切口一尺四方、長さ二間の材木を尺〆一本といふ。

た時、其の改まつた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隱れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが、陰に陽に工程の

進捗を刺戟して、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實であるといはねばならぬ。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、數百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか、實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一歩一歩、美しい小砂利の上を、神殿に近く蹈入るに隨つて、愈〻肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。



第三鳥居

參道の兩側には、盡きることを知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

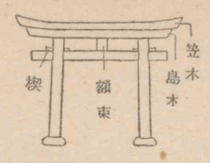
萬成　花崗石の産地。

筑波山　茨城縣の中部に聳える山。海拔八七六米。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致の好い小流で、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が錦繡の影を水面に落して、美しい秋の景色を添へてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十年の樹齡を重ねたとい

明神鳥居
柱は圓く笠木・島木はそりを持ち、額束・くさびがある。



原宿
東京市澁谷區原宿。

千駄が谷
東京市澁谷區千駄が谷。

土佐繪
平安時代に起つた畫風。

はれる直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事である。

此の鳥居の在る處は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄が谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門、拜殿、本殿等の建造物を合はせて、其の總坪

木曾
長野縣西筑摩郡木曾川の上流。

數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林產の檜材を以て造られてある。近づいて拜觀すると、芳ばしい檜の香氣が强く鼻をうつて、如何にも神の新しい宮居といふ一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿であらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂に過ぎる感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは、隱す所の無い心持で、十分な光線に總てをあらはし、總

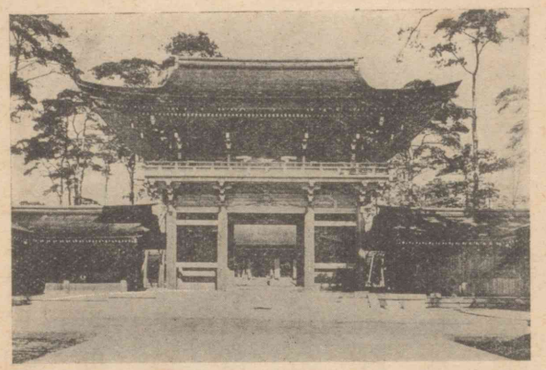
てを見せてゐる。而も、それでゐて決して淺薄といふやうな心持は起らずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と强い威力が迫り來るのを覺える。

ふさはしい

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮であると仰がれる。

久しく蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的・進取的の闊達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥に續いて便殿の遠く望まれる心持、それらの總てが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。



南神門

拜殿から、西神門の方へ出ると、約一町に亙る森林帶があつて、その向う、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が、一面に綠の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が、其處に見られ

る。

こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は、形式を中古時代に取つて、其の材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を廻つてわか〳〵しい楓の樹が美しく植ゑつ

八幡製鐵所　福岡縣八幡市にあつた國立の製鐵所。今日では官民合同して日本製鐵株式會社といふ。

植ゑる。

らねてある。

私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を、表參道の桝形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑內の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素のものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝのもので、殊更技巧を弄しない所に何ともいへ

舊御茶屋　隔雲亭といふ。

寶物殿

ぬ優雅な趣を帶びてゐる。此の御苑は、祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちに、美しく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄に包まれて、晝でも暗いほど黑々と生茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに、路線の白い色の暮殘つて續いて見えるのが、嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象を忘れる日があるであらうか。

（明治神宮紀）

櫻井忠溫
陸軍少將。愛媛縣の人。明治十二年生。十一月明治三十七年。

白井中佐
名は二郎。第三軍參謀。

齋藤中佐
名は季次郎。第三軍參謀。後、中將に進む。大正十二年歿。年五十五。

乃木少尉
名は保典。乃木希典の第二子。

二　乃木將軍

櫻井忠溫

十一月三十日の夜であつた。

第三軍參謀部の電話のベルが、けたゝましく鳴つた。

「何か？」

と、受話器を耳にあてながら言つたのが白井中佐。

「俺は白井ぢや。君は齋藤か。」

「ふむ、また失敗か。何！乃木少尉が戰死した！戰死したか？どうして――傳令中に？　さあ、それを將軍に言はんといふ譯には行くまいが、よし〳〵何とかするよ。うむ、うむ、もう一度夜襲するて。よし、弔ひ合戰をやつてくれ。さ

よなら。」

かういつて電話は切れた。

乃木大將夫妻

白井中佐は、受話器を手から離しもしないで、呆然としてゐた。眞黑なものが目の前に突つ立つたやうになつた。窓の外にはひゆうひゆうと寒い風が闇の中を吹いてゐた。

時計を見るともう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。しかし、第一、戰況を報告しなければならないので、思ひ切つて乃木大將の部屋へはひつて行つた。

部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて一寸躊躇した。しかし大將が火もつけないで部屋に居られることは、いつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んででも居られるのかなと思つた。すると暗い中から、「誰かい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか。何か用か。」

「戰況を申しあげに……。」

かういふと、ぱつと燐寸が光つた。大將の顏が蒼白く光つた。大將は蠟燭に火をうつした。蠟燭のしんがじいじいと音を立てた。

二百三高地
旅順要塞背面の重要地點をなす。小丘・海拔二〇三米。

「戰況といふと？」

「二百三高地でございます。」

「うむ、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたといつて來ました。」

「さうか。――死傷はどのくらゐあつたな。」

「は、まだはつきりわからぬと思ひますが、すぐ調べまして。」

蠟燭の灯に照らされた大將の蒼い顏を見ると、それ以上のことは中佐の口からは漏らしかねた。大將はじつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないでゐた。中佐は大將の顏を打ちまもつてゐると、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶる〳〵と震へた。

震へた

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將が思ひ出したやうに、かういつた。

「はい。」

「もうそれだけかい。」

「それに、閣下、御令息が戰死されました。」

中佐の口から我ともなしに吐出された言葉であつた。

何だか大將から引出されたやうに。

「何！保典が？さうか。」

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまつた。

そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はじつとそこを見つめた。しかしもう何の音もし

友安旅團長
名は治延。後中將に進む。大正二年歿。

吉岡中佐
名は友愛。明治三十八年奉天で戰死した。歿後歩兵大佐に進む。

津野田參謀
名は是重。後、陸軍少將に進む。昭和五年歿。

なかつた。中佐は足を忍ばして外へ出た。

ごう〳〵といふ風の音が、窓の外を通り過ぎた。

保典少尉は、友安旅團長の副官であつた。三十日の午後八時頃、旅團長が殘れる二中隊を提げて突擊するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。乃木副官は承つて塹壕内を前進中、額に銃彈を受けて即死したのである。

この報を電話で話したのが、軍の參謀――第一線の狀況視察のため二百三高地に出てゐた齋藤中佐であり、これを聞いたのが白井參謀であつた。

軍の高級副官吉岡中佐が乃木少尉戰死の報を聞いたのは、白井中佐より少し後れてであつた。吉岡中佐は津野田

參謀にどうしたらいゝだらう、將軍に話したものだらうかといつて、當惑してゐたが、結局津野田參謀が話すことになり、乃木將軍の部屋に入ると、將軍はまた蠟燭に火をつけた。

津野田參謀が恐る〳〵乃木少尉戰死のことを報告すると、この時は、

「そのことなら知つてをる。好く戰死してくれました。これで世間へ申譯が立つ。」といつた。そして又火を消して、ころりと横に寢轉んでしまつた。

津野田參謀は手持無沙汰に部屋を出て、吉岡中佐と二人して聲をあげて泣いた。

保典少尉は、師團の傳令將校として比較的安全の職に置

かうといふことになつてゐた。師團でも勝典中尉戰死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであつたらう。

こんな話を少尉が耳にしたので、早速少尉は、父大將へ手紙を書いた。

一、先日私自分にて荷分け致せし外、母上様より御送附相成候マント、此の者に御渡し有之度願上げ候。

二、又自動拳銃を第一聯隊の故兄上様中隊へ送附の儀に付きて、私自身にて參り兼ね候に付き、何卒父上様の

乃木保典少尉（右）勝典中尉（左）

報いん

御添書を頂戴仕り度く願上げ候。

三、先日御話有之候私師團司令部へ參るとの話、歸營致し、考へ候所、現今名譽多き野戰隊小隊長より、殆ど非戰鬪員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して兄上様の仇を報いん事も爲し得ず、且は何の特別の技能をも有せざる私が、選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位置に赴くは、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者、例へば外國語をよくする者多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此の御話の儀、御變更相成らざるや、一寸御伺ひ申上げ候。尤も御命令なれば致方も無之候へ共、せめて旅順陷落まで如何にか相成らざるものにや、御伺ひ申上げ候。先は要事迄。

草々可祝

保典

二十二日

父上座下

保典少尉が兄の仇を打ちたいといふ念願、それを讀んで大將は非常に喜んだ。そして、師團司令部へは取らぬやうにしてくれと、師團長へいつてやつた。それで友安少將の副官になつたのであつたが、二百三高地で最期を遂ぐるに到つた。兄の仇を取りたいから第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のない者を師團へ取るといふのは、友人に對しても情實があるやうで心苦しいといふ保典少尉の態度は、

實に立派である。　ことに父將軍に對する親しみの情が、紙外に溢れてゐるのを見て、そゞろに涙を催さしめる。　乃木大將が、兩兒を失つての後の心の寂しさはどんなであつたらう。　この手紙を見ても、父子の睦まじさがよくわかる。勝典が死んでも、保典が死んでも、たゞさうかと多くをいはれなかつたが、心臓は張裂けるやうな思であつたらう。

この父にしてこの子ありといふことは、實に乃木大將父子の如きをいふのであらう。

（將軍乃木）

うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひて
我はゆくなり

（乃木希典）

島崎藤村
名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

隅田川
東京市中を貫流する河で荒川の下流。普通千住大橋から下をいふ。

泳いだ
〔泳ぎだ〕

三　文章道

島崎藤村

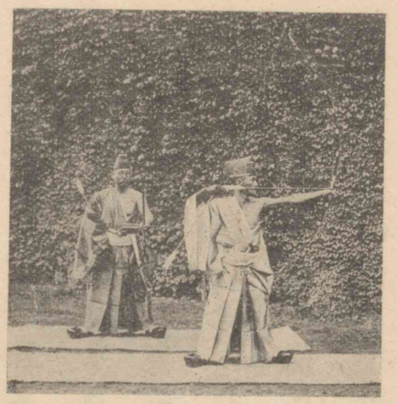
十七八歳の頃、私はよく隅田川で泳いだことがある。　全く水には經驗の無かつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通つてゐるうちに、對岸まで泳ぎ著くことが出來た。　更に又一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀨の速い遲いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫かいとも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出來た。　板子

無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人を見たりした時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違無い。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違無い。

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心

小諸　コモロ。長野縣北佐久郡淺間山の西南にある町。

掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が、私達の弓場へ來た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令、的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同



射　弓

作らう。

じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當嵌めて見ることが出來る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ自己から正してかゝらなければならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬を擔いで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には大根・白

さく　土をあげて根にかけること。

菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、さくをかけに行つた。馬鈴薯の花の白く盛りな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出す

ことが出來る。我々が文章の手本とすべきものは、何程我我の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無いそれを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。試みるといふことは、悟るといふことの初めである。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは、無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出來る

新片町　シンカタマチ。東京市淺草區。
淺草橋　神田川に架かつてゐる橋。
兩國橋　隅田川に架かつてゐる橋。

やうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く樂しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。簡素の美がある。文章の道にも無暗に筆を弄することが、決して自己の眞の表白とはならない。

眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

（飯倉だより）

伊勢松阪　三重縣松阪市。

老舗　シニセ。數代繼續してきた商店。

岡部先生　賀茂眞淵。

四　松阪の一夜

編者

時は夏の半ば、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆくお伊勢參りの群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松阪なる日野町の西側、古本を商ふ老舗文海堂柏屋兵助の店先に、「御免。」といつて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居舜庵であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名を宣長といつて、皇國學の書やら、漢籍やらを常に買ふこの店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、

「あゝ殘念なことをしなされた。あなたがよく名前を云つておいでになつた江戸の岡部先生が、若いお弟子と供を連れて先ほどお立寄りになつたに。」

といふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、

「先生がどうして此處へ。」

と、あわたゞしく問ふ。

主人は、

「何でも、田安樣の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日新上屋へお著きになつた所、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいとの事で、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお

田安樣　田安宗武。德川吉宗の第二子。眞淵に從ひ學ぶ。明和八年歿。年五十七。（一三七五—二四三一）

書肆文海堂の額

休みになつて、參宮にお出かけになりました。」

舜庵、「それは殘念なことである。どうかしてお目に懸りたいが。」

「迹を追うてお出でなさいませ。追附けませう。」

と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聽取つて迹を追うた。

迹を追うて松阪の市街を離れ、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追附き得なかつたので、すご〳〵とわが家に歸つて來た。

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松阪なる新上屋に宿

垣鼻村　三重縣飯南郡飯南村の大字。松阪の南に接した地。

二見が浦　三重縣度會郡二見村の海岸。

鳥羽　三重縣志摩郡に在る町。日和見山は町の西北にある小丘。今は日和山といふ。

つた。

「若し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」

と賴んで置いた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春鄕は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれども頗ゆたかな此の老學者に相

村田春鄕　眞淵の門人。歌人。江戸の人。明和五年歿。年三十。（一三九九—一四二八）

村田春海　春鄕の弟。眞淵の門人。歌人。文化八年歿。年六十六。（一四〇六—一四七一）

冠辭考　十卷。枕詞を集めて、五十音順に配列註釋した書。

萬葉考　六卷。萬葉集の註釋書。

有德公　德川吉宗。

契沖　眞言宗の僧。大阪に住んでゐた。國學者。元祿十四年歿。年六十二。（一三〇〇—一三六一）

ゆくりなし

古事記　三卷。神代から推古天皇の朝までの事を、元明天皇の朝に太安萬侶の記したもの。

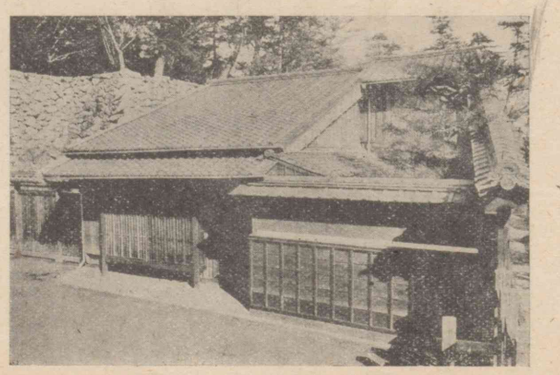
對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に蟠つてをる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も彼は二十三歳の時、京都に遊學して醫學を學び、二十八歳にして松阪に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。

「我も固より神典を解き明らめんの志があつたが、それには先づ漢意（からごころ）を淸く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。

萬葉　萬葉集。

古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡いくばくも無く、神典を說くまでに至ることを得ない。御身は年盛りで、ゆく先が長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者は、とかく低い處を經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬ



本居宣長の舊宅

のである。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低い處をよく固めておいて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆閉され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道の何處を蹈むとも覺えず、魚町の東側なるわが家の潛戸をはひつた。隣家なる桶利の主人は律儀者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとん〳〵と桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

村田傳藏　眞淵の門人。坂大學の通稱。

舜庵は、その後江戸に便りを求め、その翌年の正月、村田傳藏が中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とは云へ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

名簿を捧ぐ　縣居　アガタヰ。眞淵の家の號。

今を距る百七十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢の國松阪日野町なる新上屋の行燈は、その光の下に語つた老學者と若人とを照らした。しかもその仄暗い燈火は、我が國學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。

寶曆十三年　後櫻町天皇の御代。（一四二三）

澁澤榮一
實業家。子爵。昭和六年歿。年九十二。

五　社會精神

澁澤榮一

一般の風紀が正しく、且人々がその生活に安んずることが出來れば、それは理想的な社會狀態といふことが出來る。これに反して風紀が紊亂し、或は又人々が飢渴に苦しむならば、それは憂慮すべき社會狀態といはねばならぬ。而して、吾人は等しく善い社會狀態の實現を要望してゐることはいふまでもない。然らば理想的な社會狀態は如何にして實現せらるべきであるか。

現今の社會に對する世人の見方には、二種ある。それは、極端に悲觀するものと、然らざるものとである。余の如き

は、いづれかといへば、後者に屬する方である。そして、これを明治以前の社會狀態に比較して、大いに進歩向上して來たものであると考へてゐる。然るに、かの悲觀論者は、「昔は上下の別が頗る嚴然たるものであつたが、今日では著しく社會の禮節が紊亂した。」とか、「昔の人は專ら忠信孝悌の道に立脚してゐたが、現代人には不都合極まる危險思想を抱くものが出來た。」とか、或は又、「往時の學生は質樸で剛健な氣象に富んでゐたが、今の學生は柔弱の風に傾いて來た。」

澁澤榮一

とか、「人間が利に走つて、人情が薄くなつた。」とか言つて頻りに現代社會の風潮を悲觀してゐる。併しながら、如何なる時代に於ても、社會の全局面に亙つて完全を期することは困難である。從つて、その短所ばかりを數へたならば、恐らくその弊害や缺點は、上掲の事項ぐらゐでは盡きないであらう。斯くの如き悲觀說を爲さば、天下の事は何一つとして悲觀しないでよいものはないことになる。併し、吾人はそんな片手落の議論をしないで、公平な見識を持ち、冷靜に社會の光明面と暗黑面とを比較して、其の孰れが眞に優勢であるかを商量するのが當然であらう。余は此の立場から觀て、現在社會は明かに向上進歩の途上にあるとして樂

觀しつゝあるものである。然らば何を樂觀といふか。

先づ目につく著しい事實としては、社會の最大資本たる富の程度が一般に高まつてゐる。昔日の富は、主として土地、家屋のやうな物に限られて、其の範圍も分量も甚だ狹く、且小さかつた。然るに今日では有價證券といふ調法な物が出來て、經濟活動が著しく敏活になつて來た。海外貿易なども、殆ど昔日に存しなかつた富の增殖法である。その他、水陸共に交通機關が具備したことや、教育の普及したことなどは、殊に著しい進歩の現象といはねばならない。

就中、教育に於ては、維新以前には一般の人は、無學文盲で自己の姓名をすら書き得ない者が少くなかつたのである。

然るに、今日はそれと反對に全國津々浦々に至るまで、教育がよく行屆いて、無筆の人は殆ど皆無の有樣である。そして、富豪の子息も、小商人の子息も、さまで違はぬ教育を受けられるやうになつて來た。是も偏に教育普及の賜といはねばならぬ。其の他、一般社會の交際なども、教育のある人人の交であるから、昔に比して品格もよく禮儀も正しくなつた。社會は斯くの如く絶えず進歩してゐるのに、此の事實を無視して徒らに悲觀論を唱へるのは當を失したものでなからうか。

併しながら、余と雖も全然現代の社會狀態に滿足してゐるわけではない。寧ろ常に、未だ大いに足らざる點のあるのを憾みとしてゐるものである。足らざる點とは何か。それは道德の進歩が他の方面の進歩に比して、大いに遜色のあることである。社會なり個人なりの眞正の幸福は、強い信念と厚い德義とに依らなければ、到底實現することは出來難い。勿論、富や地位は、其の人の活動如何に依つて、一時的には獲得されるけれども、それさへも強い信念と厚い德義とを基礎とするのでなければ、長く保持する事は出來難い。故に、現今に於ける愛國者の務は何であるかといふに、專ら社會に仁義道德の觀念を鼓吹し、社會の上下を一齊に、眞摯敦厚の氣風に引直すことである。道德を外にして、社會の向上なり救濟なりを計るのは結局無意義な努力に

貧富の懸隔

過ぎない。

更に、も一つ注意を要することは、社會に於ける貧富の懸隔である。此の貧富懸隔の結果は、經世家が最も憂慮すべき悪い意味の社會主義を勃發させることになつて行くのである。社會が進歩するに從ひ、此の間の懸隔が次第に甚しくなつて行くことは、歐米諸國の先例が之を語つてゐる。此の事實は、何れの文明國も等しく味ひつゝある苦楚で、之を調和して行く爲に、種々の社會政策が唱道されて居る。併しながら、余は斯くの如き問題も亦、決して單なる政策によつてではなく、眞摯敦厚の風を養成する事に依つてのみ、眞の解決を得ると信ずる。富者は自ら富者としての本分を守つて、社會に向つて其の責任を明かにし、貧者も亦貧者としての本分を守つて努力勉勵し、その間に相憐相讓の風があるならば、一波の動くことなく、社會は極めて靜平であるであらう。然らば、眞摯敦厚の風は何を以て之を養成すべきかといふに、仁義道德の道を行ふより外に策はないであらう。故に、憂國の士は宜しく此の最も明瞭且根本的な救濟策に意を用ひ、大いに社會を善風美俗に誘導しなくてはならぬ。社會問題と國家問題とは恰も連鎖の如きもので、社會の風をして眞摯敦厚ならしめることが出來たならば、國家も亦自ら理想的の國家に立ち至るのは、火を觀るよりも明かな事である。

（青淵百話）

内藤鳴雪
名は素行。俳人。愛媛縣の人。大正十五年歿。年八十。

玉川
源を山梨縣に發し東京府及び神奈川縣を流れ下流は六郷川となり東京灣に注ぐ。

正岡子規
名は常規。俳人。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。

六　絲瓜の棚

元日や一系の天子不二の山　内藤鳴雪

初轍此處にも日本男兒あり

矢車に朝風強き轍かな

大船の白帆干したり五月晴

玉川の一筋光る冬野かな　正岡子規

夕立にうたるゝ鯉のかしらかな

緣に干す蒲團の上の落葉かな

畫顏
旋花科。旋花屬の多年生草本。

絲瓜
ヘチマ。葫蘆科に屬する一年生の蔓草。

玄關に畫顏咲くや村役場

一群の鮎目を過ぎぬ水の色

枯れつくす絲瓜の棚のつらゝかな

行く年を母すこやかに我病めり　夏目漱石

菜の花の中の小家や桃一木

叩かれて夏の蚊を吐く木魚かな

釣鐘のうなるばかりに野分かな

草山に馬放ちけり秋の空

初冬や竹伐る山の鉈の音

長塚節
歌人。小說家。茨城縣の人。大正四年歿。年三十七。

御地
この書翰の屆け先の鳥木赤彥の居所、長野縣諏訪をさす。

かど
事柄。

かりん羹
正しくは、くわりん羹。くわりんの果汁を混じて製した羊羹。

七雁信

一秋涼　　長塚節

拜啓、秋氣漸く身にしみ〴〵と致し來り候。御地には霜降り候噂も有之候が如何に候や。

此の間中はこま〴〵の御手紙、桑畑のこともほゞ承知仕り難有奉存候。肥料ぎらひの連中に見せて大いに說明を試み申候。小生も隨分奮發して桑作りいたし可申候。後日更に御尋ね可仕かども有之候。其の折は改めて御示教の程希望仕り候。今回はまた名物かりん羹御贈り下され、かさねがさね難有奉存候。あれ

芙蓉
フヨウ。木芙蓉の略。錦葵科に屬する落葉灌木。

では却つて御返禮が過ぎ申候と御氣毒に存申候。端から押し出すところ、其の具合殊に氣に入り申候。自慢して人にも味はせ申候。

今夜月明かならず、洋燈の光にて緣先の芙蓉の花白々と見え申候。萎靡たる花の形、夜見るに相應してえもいはぬ風情に有之候。草々。

（長塚節全集）

芋の葉にこぼるゝ玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつゝあらむ

（長塚節）

島木赤彦
本名久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿。年五十一。

昨日云々
此の書翰は大正十三年一月二十八日に認めたもの。

沼津
静岡縣沼津市。

修善寺
静岡縣田方郡。

船原
静岡縣田方郡中狩野村。

土肥
静岡縣田方郡。

馬醉木
石南科に屬する常綠灌木。

冬の葉
冬の常磐木の葉。

二　伊豆の旅

島木赤彦

昨日沼津下車の處、風荒れて船立たず、引返して修善寺驛下車、そこより三里の船原溫泉に泊り候。溪流に沿ひ、庭に幾抱へもある古椎、その他樹木多く、特に杉山つづきにて閑寂の一夜を過し候。今朝船原を立ち三里山越をして午後土肥に著き候。山道は、つげ・樫・椎・馬醉木等の冬の葉、日に光り飽くを知らぬ心地いたし候。殊に山上の枯草原より大海原を雲際微茫の間に望みしは壯快限りなく覺え候。下り道は半ば以下は椿の花盛りに候。土肥は今日あたりは室内に火氣を要せ

微茫の間
ビバウのカン。

齋藤君
齋藤茂吉。

假小屋
火災後の假の病院をさしていふ。

ぬ程の暖さに候。小生身體益〻元氣を加へ候間、御安心被下度候。一昨日、半日齋藤君に逢ひ候。假小屋にもあたらぬ處にて、診察するといひて、一人で頑張り居る元氣、悲壯を覺え候。その日、一人外來患者ありし由に候。二三日溫泉行をすゝめしに、いつ外來診察あるか分らぬ故、毎日此處に居らねばならぬと申候。覺悟の程察すべし。小生五日に此處を立たんと存候。敬具。

（島木赤彦全集）

わたの原光にさはるものもなし遠くはるけく雁の過ぎつる

（島木赤彦）

八　膽力の錬磨

嘉納治五郎

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入しても、從容自若として更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ懸つても、悠然と澄ましてゐることが出來るが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちても、膽を冷し色を失ふやうなことになるものである。

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら眠つて居たとか、徳川

嘉納治五郎　教育家・講道館師範。貴族院議員。兵庫縣の人。萬延元年生。

徳川光圀　水戸藩第二代の主。元祿十三年歿。年七十三。（一二八八―一三六〇）

光圀が六歳の時、暗夜に刑場に往つて死人の首を取つて來たとかいふのは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ武士があつた。其の容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、其の性質は至つて卑怯であつた。信玄は、どうかしてこれを矯正しようと考へて、或日の戰に、彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて一歩も身動きの出來ないやうにして置いた。矢丸は雨のやうに飛んでくる、砲聲は雷のやうに轟く。彼はその怖しさに、殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし幸にも一つも矢丸が中らな

矯正しようと

雨のやうに

かつた。そこで、彼は飜然として、運さへあれば矢丸も中らない、死は決して畏るべきものではないと悟つて、それからは戰爭ごとに勇を振つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衞門が戰を恐れたのは、彈丸雨飛の危險を過大視したからである。これは戰爭のみならず多くの場合によくあることで、危險・災害の身に迫つた時、直ちにその結果を過大に豫想して恐怖狼狽するのは、神經質な人ほどあり勝のことである。ところが、平素修養あり、經驗あるものは、決して恐怖狼狽することはない。消防夫が炎々と燃えあがる猛火の中に泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に

自由に働くのも、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく多くの鍛錬と經驗とを積むことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふ心の持方が必要である。危險・災害等の來る場合に、なるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却つて怯懦に陷ることがあるものである。最も悪い結果を身に引受けても、是非に及ばぬと覺悟すると、膽は自然に据わるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて敵の命を取るといふ風に、死身になつた上で、手段と技倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりも自由

が利くから、自然數倍の働をすることが出來る。

勝海舟は白刃を蹈みながら、談笑の間に天下の大事を決した英傑であるが、左の如く語つて居る。「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを眞面目に修業したが、德川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。度々刺客かなんかに脅かされたが、何時も手取にした。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれたのだ。危險に際會して逃げられぬ場合には、まづ身命を捨ててかゝつた。さうして不思議にも死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顚倒し、進退度を失する

やうな患を生ずる。又遁げて防禦の位置に立たうとすると、忽ち萎縮の氣が生じて相手に乘ぜられる。大小の事、皆この規則に支配せられるのだ。自分はこの精神上の作用を悟つて、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虛心坦懷で事變に處した。それで、小にしては刺客・亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽々として餘裕あることが出來た。」と。

海舟は、主として劍術と禪學とで、膽力を錬磨したのである。理窟の上から膽力を養成することは容易でないが、實地の修業において膽力の錬磨せられることは、殆ど人の想像以上であると謂つてもよい。

（青年修養訓）

落合直文
號は萩の舍。國文學者。歌人。宮城縣の人。明治三十六年歿。年四十三。
己が故郷宮城縣本吉郡。

父君鮎貝盛房。

九　七株松

落合直文

七株松とは、己が故郷の家の庭前に、父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひし年月は、明治十五年の冬、霜雪降り凍る時なりけり。その折一封の書を寄せ給へり。その中に、「汝等兄弟どもの齢を祝ひて、七株松を植ゑたり。この松の變らぬが如く、よく霜雪に堪へて、學の道を勵み勉めよ。」とあり。

己が兄弟は七人なり。上には姉と兄と各〻一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家にて育ちしかど、他は皆里子となりて、人の手にて育ちたり。父君はさまで心にとめ給はざりしかど、母君は如何にして、この數多の兄弟を教育せんと、常に案じ煩ひ給ひたりとか。明治四年の春ばかり、己と次の弟とを携へて仙臺に上り、それ〴〵學校に寄宿せしめ給へり。一人手を離るれば、母君は暫しも、心を慰め給ふ折なし。その後、姉は他に嫁ぎ、己は落合家に養はれ、一人の弟は壹岐家を嗣ぎ、妹は飯田家の養女となれり。家に殘れるは、兄と次の弟とはての弟と三人なり。兄弟の多きは、兄弟そのものの爲には、いふべからざる幸福なれど、親の身に取りては、これより心盡しなるものはなからん。

落合直文

松岩　宮城縣本吉郡松岩村。

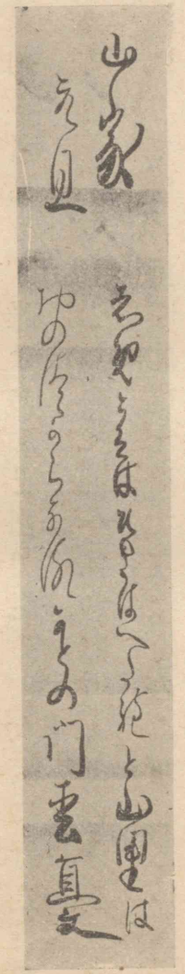
七株松は、七人の兄弟にちなみて植ゑ給へるものなり。その松は七株とも一處に生ひたれど、我々兄弟は未だ曾て一堂のもとに會したることなし。己、松岩にありし頃は、二人の弟と妹とは里にあり。己、仙臺にありし頃は、姉と兄とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去る時は姉來るなど、あるは二人、あるは三人、多き時も、四人より多かりしことはなかりしなり。殊に己は、早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること最も少かりしなり。

同じく十一年、次の弟都に上れり。他鄕にて兄弟に會ひしは、これを始めとす。翌年、その次の弟また上れり。それより二年經て、妹また上れり。されどその折は、次の弟家に

根岸　東京市下谷區に在る。

歸りてあらず。十五年、次の弟上れり。その折は、その次の弟、大阪に行きてあらず。あくる年、はての弟上れり。他鄕にて四人會したるは珍らしなど語り合ふ。二十年、己、根岸に寓居せり。その年の五月、その月の三十日、夜に入りて門を叩く者あり。誰ならんと出で見るに、大阪に行きたる弟なりけり。嬉しと思ひて迎へ入れたり。その弟、養家に急用ありて、明日拂曉、此處を出で立たんの心なりといふ。兄弟五人會せんことは、生れて始めてなり。明日は他の弟と妹とを招かんほどに、一日ほど出立を延ばしくれずやと乞ふ。養父の身にかゝはりたる一大事、とてもさることならずといふ。他の弟妹に知らせずして、そなたを出で立たせ

山家元旦
しめ縄ははひき
はへたれと山里
はおのつからな
るかとの門松
直文



落合直文筆

んには、後にて恨まれもやせん。よし、これより使を遣らんとて、下谷の車坂、神田の今川小路、本郷の森川の三方へ、手を分けて人を走らす。その時午後十一時少し過ぐる頃なり。一時間ばかりありて、車坂の妹訪ひ來ぬ。また三十分ばかりありて、二人の弟前後に訪ひ來ぬ。五人一室に會したる其の夜の喜び何にたとへん。維新以後家政衰微して、完全なる教育を受くる能はずなど一人がいへば、兄弟のうちにて最も苦學せるはわれなりと一人がいふ。朝とく起きて

栗拾ひたること、夜おそくまで起き居て、凧張りたることなど、幼時より今日までの五人の歴史、悉く談話に上りたるもあはれなり。はては父の恩、母の愛など、こまかに語り出でて、父君には七株松を植ゑて、我等兄弟によそへ給へり。さばかり我等を思ひ給へり。一日も早く七人の兄弟打寄りて、膝下に孝養をなさまほしきにあらずやといふ。時に時計、午前四時を報ず。窓押開けて、五人ともに上野の方を眺むるに、杉の梢のあたり、不如歸と啼きたる杜鵑、あるは二聲、あるは三聲。その聲、如何におのれ等の腸を斷ちたらん。今なほ記憶して忘れず。

（落合直文集）

深田久彌
小說家。石川縣の人。明治三十六年生。
陸地測量部
陸地の測量を掌る官衙。參謀本部に屬する。

一〇　地圖を見ながら

深田久彌

僕は地圖を見るのが好きで、暇があれば、折疊んだ陸地測量部の地圖を擴げて見入る。何度も行つたところの地圖は、折目が裂けて、丈夫な日本紙でそこだけ裏打してある。雨に濡れて何かの色が染つてゐたり、擦切れて村の名前などが讀めぬところがあつたり、そんな地圖はもうすつかり全體が茶褐色に灼けてゐて、恰も學校の生徒が帽子の古びたのを誇りとするやうに、自分の山登りにも箔がついたやうな氣がして嬉しいものである。

澤の名前や小屋のありかなどが、必要以上と思はれるほど澤山委しく書込んである。その間へ自分の歩いた道筋が赤鉛筆で引かれてゐる。さういふ地圖を見て居ると、千軍萬馬の將軍が全勝の跡を振返るやうな氣持になつて、その當時の苦しかつた事や、樂しかつた事が種々に思ひ出されてくる。そしてその邊の澤や尾根は、大抵歩いてゐるのに、まだ取殘されてゐる大きな處があつたりすると、今晩にもルックを擔いでそこへ出かけたくなる。

ルック
ルックサックの略。

信濃の山

持出さう

不思議なくらゐ地圖といふものは妙な魅力を持つてゐる。山の好きなせゐかも知れないが、地圖を眺め出すと、もう他のことは打つちやらかしになつて、時の經つのも忘れてしまふ。緣を截つてきちんと十六に疊んで、その表へ地圖の名前を貼りつけて、……さういふ子供らしい所作までが僕にはこの上もなく樂しい。それを二十萬分の一の區域毎にわけて、カードのやうに箱に收めてゐる。火事の場合にはこれを最初に持出さうと思つてゐるほど大事な品である。無理もない、この中には、一日丸潰しにして色鉛筆で綺麗に隈を入れたのや、友達の祕藏する地圖を無理に借受けて名前を書きこんだのなどがあるのである。

標高線

山に行けない時は、地圖を見ながら山を想ふ。まだ行つたことのない山々を地圖の上であれこれと思ひめぐらしてゐると、簡單な記號までがいき〳〵した實感を伴なつてきて、恰もそこへ行つてゐるやうな樂しい氣持になる。

標高線のこみ入つた山岳重疊の間に、ふと目の粗い線の場所を見つけると、僕は直ぐゆつたりとした氣持のいゝ斜面を思ひ浮べる。若しそこに草地の記號でもついて居ようものなら、僕の喜びは二層倍である。僕は煙草をふかしながら、その日あたりのいゝ草原に寢ころんで周圍の山々を見渡してゐるやうなのんびりした氣持になる。

又、複雜した山の襞襞の間へ、血管のやうに入込んだ谷川

のさまも興味をそゝる。そゝり立つた兩岸の間を流れる谷川には、よく斷崖のしるしがついてゐるが、あの黑つぽい記號が蜿々と數粁もつゞいてゐる部分にぶつかると、これは凄いぞと思ふ。そして足下に轟轟たる音を聽き、碧を凝らした水が渦卷き流れゆくさまが眼の下に見えるやうな氣がする。

激流

さういふ人の匂ひに遠い山と谷川ばかりの中に、細々とした波線が迂りながらついてゐたりすると、ほゝう、こんな所にも道があるんだなと妙に親しい氣がする。その道が尾根を越すところには、いかにも昔の村人が考へついたやうな鄙びた名前の峠があるのも懷かしい。數年前までは女子供まで手甲・脚絆で越えた道であらう。しかし今はもう山登りに行く都會人以外には、かういふ峠を越す人も尠いであらう。汽車の便がついて以來、峠路によることは大方すたれたと言つていゝ。殊に山深い國ざかひの峠はさうである。會津から越後に越す八十里越などいふ峠は、地圖で見ただけであるけれど、何か荒れ果てた感じがする。峠の上からどちらの部落へ出るにも、つゞら折の長い〳〵道を行かねばならない。その

手甲　テツカフ。布帛などで造り、手の甲だけをおほふもの。

脚絆　キヤハン。はばき。旅行するとき脛にあてて締めるもの。

會津　福島縣會津盆地をさす。

越後　新潟縣の大部分をなす國名。

八十里越峠　福島縣と新潟縣との堺にある峠。

つゞら折

淺間山　　峯雄

峠の上に、木の根茶屋といふ茶屋が記入してあるのも、何か昔を忍ぶやうな哀れな感じを催させる。

地圖を見てゐると、こんな勝手な空想が種々と涌いてきて樂しい。殊に僕は汽車の中で地圖を見るのが大好きである。晝の汽車は退屈だと人は言ふが、僕にすれば眠り難い夜行よりも晝間の方がどれだけ有難いか知れない。僕は汽車の旅をする時には、必ずその沿線の地圖を全部持つて行く。家に籠つて見てゐてさへ樂しい地圖を、移り變る風景と引較べて眺める面白さは、汽車の退屈さなど吹飛ばしてしまふ。一つの鐵橋を渡る。僕は直ぐ地圖でその川の名を確める。それからその川の水上を尋ねると、それは

遠くの山々の間を幾めぐりかして流れてきてゐる。僕はさういふ遙かな水上の山里の有様を想像するのが好きである。新聞が一二日も遲れて著くやうな、さういふ邊鄙な山里の煤けた圍爐裏ばたや、あやしげな軸の掛つた部屋などが眼に浮んでくる。あゝ僕は山々の行き歸りに幾度さういふ家で泊つたことであらう。

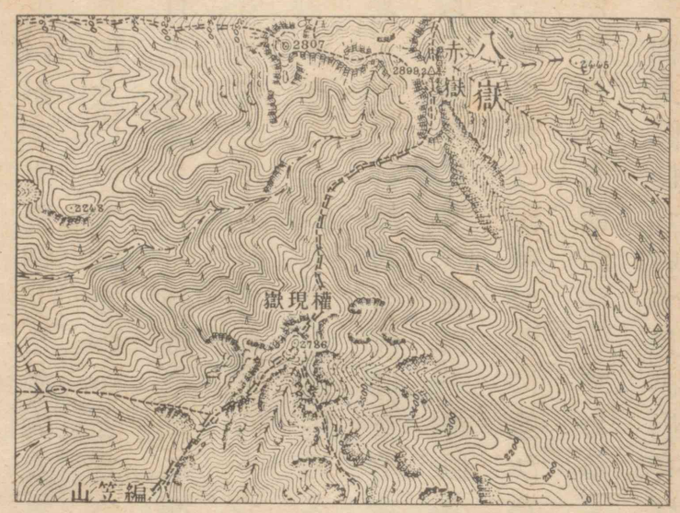
次々と違つた形で現れてくる山々を、一々地圖と照し合はせてその名を覺えてゆくのも樂しい。僕はいつも山に面した汽車の座席を占め、地圖と山との睨めつくらをする。山の好きな人は誰でもさうであらうが、どんな低い丘みたいな山でも、眼に入る限りは名前を知つてゐないと殘念な

ものだ。

嬉しいのは汽車がカアヴに差しかゝつた折などに、その低い山々の間にひよいと見覺えのある高山の姿が見えたりする時である。僕は一瞬でも眼を離すのが惜しいやうに倦かず眺める。しかし、氣まぐれ者のやうに汽車は直ぐ向きを變へたり、トンネルへ入つたり、丘の際を通つたりして、この胸をそゝるやうな懷かしい遠望を十分に滿してくれないのが常である。

山の好きな人で、かういふ地圖の魅力を知らない人は誰もないであらう。一見何の奇もない、たゞの曲線と記號だけの地圖が、こんなにも不思議な力を持つてゐるのはどう

八が嶽
長野縣諏訪・南佐久兩郡界に在る連峯。赤岳（二八九九米）を最高頂として、權現岳・編笠嶽等の諸峯が列立してゐる。



八が嶽地圖

したことであらう。しかし仔細に見てゐると、どの地圖にもそれ〴〵の變化があつて、見慣れるほど親しみが涌いてくる。自然の美しさは、地圖の上にも美しい曲線になつて現れる。例へば五萬分の一の八が嶽圖幅を見てゐると、赤岳・權現岳を中樞にして末廣に擴がつた曲線はまるで孔雀が翼を張つたやうに美

大河原　長野縣下伊那郡大鹿村大字大河原、赤石山麓。
赤石嶽　長野縣下伊那郡に在る。海拔三〇九五米。
南アルプス　長野縣諏訪湖岸から起り、一線南走する荒川嶽・仙丈嶽・釜無嶽・赤石嶽・黑帽子山等の連峯をいふ。

しい。大河原や、赤石嶽など南アルプスの地圖を見てゐると、いかにも荒削りな雄大な氣がしてきて、その曲線さへ一しほ太いのではないかとさへ思はれる。二十萬分の一の日光も美しい。圖幅全體に滿遍なく山々をばら撒いたやうで、ぼんやり見てゐてもうつとりする位である。

さういふ山や、澤や、部落の名前を讀みあさるのも樂しい。どうして自然の名前はこんなに美しいのであらう。おそらく何百年もの間に、一番似つかはしく呼び易く響きのいいものだけが殘つたに違ひない。實際、考へもつかぬやうな美しい名前がついてゐる。

尙、地圖について思ひ出せば、まだ〳〵種々なことが浮んでくる。僕は暇があれば、地圖を擴げて見る。新しいのや、古いのや、行つた所のや、行かない所のや、部屋中一杯に地圖を撒散らし、片脇に山の本と色鉛筆とを置いて、地圖の上の勝手な山旅をする。細かい印刷に眼が疲れてくると、ぼんやり窓外の大空を仰ぎながら、とりとめもない山の空想に耽ける。これが心鬱した時の僕の唯一の樂しい氣晴しと言つていゝのである。

（わが山山）

本課の文は昭和三年發行の原本から再錄した。

新渡戸稻造　法學博士。農學博士。教育家。岩手縣の人。昭和八年歿。年七十二。

夢想兵衞　瀧澤馬琴の「夢想兵衞胡蝶物語」中の人物。

和莊兵衞　遊谷子の「異國奇談和莊兵衞」中の人物。

一一　國際的標準

新渡戸稻造

七十年前、フランスの小說家が、「八十日間の世界旅行」を書いた時は、讀者は之を學術上の豫言とは思はなかつた。一種の空想として、我が國の夢想兵衞が凧に乘り、和莊兵衞が鶴や龜に乘つて、世界各國を巡回した物語と同樣に見られた。然るに、その後、汽車・汽船が發明されて、八十日は愚か、その半分もあれば、我が圓い地球を一周する事が出來るやうになつた。三年前、一米人が企てた世界一周は、日數二十八日と六七時間を要したと記憶する。今後、飛行機の發達で、この日數が半減されるに違ひない。五年前或英國人の計算した所に依ると、ロンドンと東京の普通の通路に依れば五十日を要するが、シベリア鐵道に依れば十八日で間に合ふ。然るに現に公開されてある飛行機を利用すれば、十日でゆつくり日本に來られるといふ。

此のやうに各國の距離が縮少すれば、風俗・習慣等も自然に相互に近づいて來ることは明かである。強ひて世界から孤立しようとすれば、却つて個人にしても、國家にしても損失を招き存在を危うする。例へば我が國開國の當初は、金銀の價の差は四と一の割合であつたが、西洋諸國では十六と一の比であつた。それで西洋人は爭うて銀四を以て金一に替へ、その金を本國に送つて、金一を銀十六に賣つて

巨利を貪つた。それが爲に金のどし〳〵外國に流出するのを防止しようとして、幕府は大いに苦しんだ。かく自國の標準が世界の標準と大いに違へば、國は損失を蒙るのである。

美術品にしても、さうである。明治の初年に美術が廢り、又神佛混合が廢せられた時、寺院や佛像を顧みるものなく、大きな佛像を碎いて薪に燒いたり、奈良の五重塔を五十圓で賣渡さうとした時代には、日本の美術の標準が全然狂つてゐたから、作のよい物は外國人に買占められて、この頃になつて之を買戻すに大いに苦心してゐる人がある。これも一時たりとも、我が國の美術鑑賞の標準が、世界の標準と

奈良の五重塔
興福寺の塔。

あまりに懸離れたから起つたことである。

聞く所によれば、郵便切手の色は各國政府の勝手に定めるものであるが、萬國郵便同盟に於て、何れの國も自國用の切手には赤色を用ひ、外國用のものには青色を用ひる發議があつたので、多數の國はその通りに實行するに至つた。郵便切手の色を統一することは、些事ではあるが、郵便局で郵便物を捌くに、一々名宛を讀まずに內外の區別をなし得るのみでも、少なからぬ時間が節約されて、或人の計算に依れば、世界各國が此の切手の色を定めたために省けた手數を、費用に換算すると、每日數百萬圓に上ると云ふ。

又螺旋の大きさは、懷中時計に使ふものから、造船或は建

築に用ふるものまで、大小種々樣々ある。故に螺旋の種類は、四萬もあると聞いてゐる。それで、只一本の螺旋を失つても、之を補ふには、何處の國の、何の會社の、何の原料の、何番なるかを明かにせねば補ふ事が出來ない。然るに數年前、世界各國の螺旋の製造家が國際會議を開いて、世界共通の標準を定めた爲に、何々製の何番と云へば、何處の國にでも解るやうになつて、螺旋を使ふ人の便利を得たことは多大なものである。藥についても同じ事がある。同じ名を有する藥が、獨逸製と佛蘭西製と日本製とでは、皆その要素と分量が違ふから、その使用が實に危險である。故に近頃は大事な藥は、世界的にその標準を定めるに至つた。

國際聯盟
歐洲大戰後世界の恒久平和を目的として成立した。

世界共通の標準を必要とするものは、右に述べたやうな物質的の事柄にのみ限らない。學問に就いても何か一般的の制限を設けなければ、甲の國の大學者も乙の國では認められず、同じ名稱の學位でも、國々の標準が異なれば、國外に於ては十分な信用も威嚴も保ち得なくなる。故に、現に國際聯盟の知的協力委員會に於ては、學位の標準に就いて各國の制度を調べてゐる位である。これに就いて思ひ出すが、書物の大きさも統一する必要があるまいか。今日のやうに一國で出版した書物が、あらゆる文明國に傳播されるに當つて、書籍の整理上、其の大きさに一定の標準があれば、便利なことは、何れの圖書館に於ても切に感じて居るこ

とである。或人の如きは、學問に就いて書物の大きさなり、或は表紙の色なりを一定したら、それ丈でも圖書館の爲には少なからぬ勞力が省けるであらうと言うた。

斯くの如く何事に依らず、人類全體を結びつける道筋が數多あることは疑ひない。その道筋に關係の薄いものには如何にも馬鹿げて見える事が多いけれども、遠きを慮る者には、如何に小さくとも、それに依つて國と國、國民と國民とが互に睦み交り親しむ方法が增せば增す程、人類社會の共同協力が行はれて幸福を增すべきである。

（東西相觸れて）

大町桂月　名は芳衞。文章家。高知縣の人。大正十四年歿。年五十七。

國破れて云々　杜甫の詩に、「國破れて山河在り。城春草木深し。」

三代云々　尼子經久・晴久・義久。

月山　島根縣能義郡廣瀨町字富田にある。そこに尼子氏の據つた城址がある。

二二　山中鹿之助

大町桂月

「國破れて山河あり。」と詠じけん、あはれ、山陰・山陽の間に雄視せし十一國の太守、僅に三代數十年にして亡びたるだに遺憾やる方無きに、螻蟻に等しき己が命の惜しさに、國を賣り、君を賣り、恬として恥ぢざる佞人ばら、城を枕に國に殉ぜんとする死士をよそにして、むざ〳〵と月山の金城湯池を敵に明渡し、主君を天涯の楚囚となし、罪なくて牢屋の月を眺めしめたる、何等無限の痛恨ぞ。憎さも憎し、毛利の一族、君の仇なり、國の敵なり。來れ、義を知る山陰の武夫よ、その折れたる太刀を磨け、その破れたる鎧を繕へ。國既に亡び

たれども、なほ奉ずべき主家の一塊肉存せるにあらずや。七難八苦は平生神に祈る所、一死君の爲には何かあらん。

滿腔の孤憤天地に横溢し、切齒扼腕一呼して起てば、毛利氏爲に肝膽寒く、出雲の山河爲に震鳴しぬ。嗚呼、壯なるかな。六尺の孤、公にあらずして誰にか託せん。公の義、公の勇、洵に百代に超絶し、殊に公が不屈不撓の精神は鬼神をして感泣せしむるに足れども、如何にせん、我は敗餘の殘卒、馬疲れ糧乏しきに、敵は我に幾倍せる精鋭新勝の軍、加ふるに小早川の智謀と吉川の武略とを以てす。戰つて敗れ、敗れて又戰ひ、刀折れ矢盡きぬ。嗚呼、大廈の將に顚れんとする、一木の能く支ふべきにあらず。尼子氏の再擧終に功を奏

小早川　小早川隆景をさす。
吉川　吉川元春をさす。
大廈云々　文中子に、「大廈將レ顚、非二一木所レ支也。」とある。
尼子氏　尼子勝久をさす。

せざりしは天なり。豈公が戰の罪ならんや。

由來、成敗を以て英雄を論ずべからず。涙ある者は公が孤忠に泣け。つゆ廉恥の何たるを解せず、武士道の何たるを解せず、一身一家の利害の爲に臣節を左右にし、去就反覆常なかりし當年の山陰武士の間に、公の如き熱血鯁骨の眞男子ありたるは、犬豕の中の麒麟にも譬へつべし。人生五十年、功名富貴果して何物ぞ。成敗利鈍天に任せて、鞠躬盡力、斃れて後已まむ。この精神は實に山中公に之を見る。公や一身總てこれ膽、心血を社稷に灑ぎ、俯仰して天地に恥ぢず、俠骨稜々として千載に高く、後世風を聞けば、頑夫も廉に懦夫も立つ。偉なりと言はざるべけんや。（桂月全集）

頑夫も云々　孟子に、「聞二伯夷之風一者、頑夫廉、懦夫有レ立レ志。」とある。

一三　雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霙も。天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。

降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて、風無き寒さに、雀ふくらむほどはともあれかくもあれ、そとおろす風に連れて、ちら〳〵と降り出づる始めより、檐の玉水日に燿ふ光長閑に融け盡す終りまで、いづれかをかしからざらん。先づ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、樫の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら〳〵と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。

又春の雪の大きく輕らかに降りて、落つるとやがて色無き水の昔に返る淡々しさも懷かしく、消ゆる消ゆるも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿の子斑の夏の富士を見せ、松・栂・樅などの梢には、天華俄かに落ちかゝるかと疑はしむるも趣あり。

されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末掛けて春の初めの頃、陽氣既に動きて、陰氣猶いと盛んなる時のことなり。寒さ甚しからねば、雪細かならず、暖かさ未だしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且輕やかなるに、而も一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛んに下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に

漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて、仙境の縹渺を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毫飄り零つる景色、見る眼もあやに、美しき限りなり。

總て降る時の眺には、廣き處より狹き處好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ、光を障ふるものなれば、降りしきる眞中は、遠きは全く見えずして、却つて狹くなり、近きは聊か霞みて、狹きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

晴れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して、鏡新に明かなる空の、蒼々と朗かなるが下に、渣滓錬去つて銀

馬をさへ眺む　芭蕉の句に「馬をさへ眺むる雪のあしたかな。」とあるによる。

金閣　京都市上京區にある鹿苑寺の別稱。

銀閣　京都市左京區にある慈照寺の別稱。

眞如堂　京都市左京區にある天台宗の寺。

岡崎　京都市左京區にある。

栂尾　トガノヲ。京都市の北郊にある山。高尾・槇尾と連なりて三尾といふ。

曇無き地の、皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに、面白く思はる。

「馬をさへ眺む」と人の言ひたる旦、朝日の光いと華やかなるに、疎林に禽起つて、飛んで又還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。

西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水、皆畫とすべし。栂尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。

木曾の寢覺の床の、巖ば鬼斧に任せて千古冷やかに峙ち、潭

雪の金閣寺

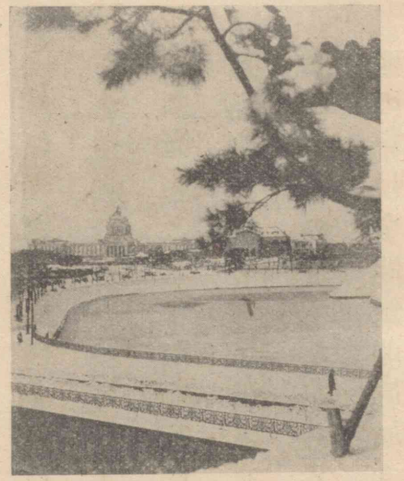
寝覺の床　長野縣西筑摩郡上松町にある名勝の地。

山王臺　東京市麹町區。官幣大社日枝神社がある。

溜池　山王臺の下にあつた池。今は地名にのみ殘る。

不忍の池　下谷區上野公園の山の池。

は藍靛を湛へて、一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋稍〻重く、璧の簪を戴ける松のむら立のあたり、姿をも見せで名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんど、二十年の昔の、今も猶わが胸に鮮かなり。



東京の雪

東の京は、御濠の水穩かに、浮寢の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比ひ無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔、徒に懷かし。不忍の池、一望千頃の景は言はずもあれ、石橋のさゝやかなるを渡つて、湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ、鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとや言ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりと稱ふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

（洗心錄）

待乳山　マツチヤマ。淺草區聖天町にある小丘で、隅田川に臨んでゐる。

相生橋　アヒオヒバシ。隅田川の河口に架す。中央に中島がある。

海鷗　カイオウ。

一四　はやり詞

新村出

新村出　文學博士。言語學者。帝國學士院會員。靜岡縣の人。明治九年生。

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて、其の時代の反映をなして居る。吾等が幼き耳に、慈母から聞いたお伽噺の中にある日本一の黍團子や、日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた日本一の語も、その起原を探つて見ると、やはり一時代の流行語として廣く用ひられた語で、確かにその時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などといふほめ詞は、如何なる時代でも誰でも自らこしらへて使ひ得る詞には相違無いけれども、それが一時代に非常に流行してをるのを見て、その當時の國民の思潮がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかりに壯んであつたらうと想像されるのである。

日本一といふ形容語は、足利時代より德川時代へかけてのはやり詞と自分は認めるが、その以前に用ひられなかつたのではない。優にやさしき平安時代の宮廷の裡に育つた婦人でさへ、例へばきかぬ氣を以て世に聞えた才媛清少納言の枕草子の如き書物になると、なか〳〵の勢ひで、「總て人には一に思はれずば、更に何かせむ。二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらむ。」などいふ位の見識があつたのだから、日本一といふ程の考がない譯はあるまい。濱松中納言物語、大鏡などにも、はや「日本一」「日本第一」といふ賞美語が

すべて人には云云　清少納言の枕草子にある語。

濱松中納言物語　菅原孝標女の著。平安時代後期の物語。

大鏡　文德天皇から後一條天皇に至る百七十餘年間の歷史を假名混り文で記した書。平安時代後期の作。

平治物語　平治の亂の始末を記した軍記物語。

曾我物語　曾我兄弟仇討の物語。

義經記　源義經一代の物語。

いづれも二箇處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語の如き軍記物には、「日本一の不覺人」、「日本一の剛の者」などの文句があり、當時代の初期の文書には、「日本第一の天狗」などと出てくるので、段々廣く用ひられて來たやうである。しかし足利時代になると、この俗語は益〻頻繁に用ひられ、又その意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語には、「日本一の不覺人」といふ句が出てをるが、義經記になると、數箇處に見えてゐる。例へば靜御前を「舞においては日本一にて候」といひ、「日本一といふ宣旨を賜はりけると承はり候ひし」といふやうに、最上級の讃美言としてあちこちに使はれてゐる。謠曲などに、「日本一の御機嫌にて候」、「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ」、「日本一烏帽子が似合ひ申して候」などの使ひざまになると、如何にこの語が流行したかがわかり、從つて意味が大分擴がつて來た事が知れる。丁度同じ頃であらう、お伽噺に黍團子をほめても、「日本一」といひ、花咲爺をほめても、「日本一」といひ、無闇にこの語を使つてゐる。謠曲で用ひてある以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大小」などと見える。要するに足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。朝鮮や支那の沿岸を荒し廻つて、所謂倭寇を試みた時代である。朝鮮との交通や、明との交通も盛んであつた時代である。末期になると、西洋や

狂言　能樂の間に行はれる一種の滑稽な演技。

清女　清少納言。

南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は、一層盛んになつたのである。如斯のく外に向つて大いに發展し、飛躍せんとする元氣を持つてゐた當時の我が國民は、内に在つては常に覇者たらんとする氣概を有し、清女のいはゆる、「一に思はれずば、さらに何かせむ。」の意氣を持ち、日本一・天下一・三國一たらんずる心がけがあつたものと思はれる。

徳川時代は鎖國時代・封建割據時代である、國民精神の萎靡時代である。將軍が唯一人江戸に構へて御座つた時代である。この征夷大將軍が卽ち天下一であり、日本一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光を謳歌しつゝ、「日光を見ないうちに結構といふな。」といつた。しかし、徳川氏

醒睡笑　八卷。元和時代に出た輕口噺の本。安樂庵策傳の著。

西塔　比叡山延曆寺の西塔。

の時期に日本一の語が流行したことは、葡萄牙人の書いた日本文典の中に、形容詞の最上級として、この語を天下一といふ語と共に擧げて、「彼奴は日本一大けなげ者ぢや。」「天下一の學者である。」などの例を示してをるのでも知れよう。

當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには、猶往々この語を用ひ、「唐までも日本一の月夜かな。」「名木の花ぞ日本一の谷。」などとやつてをる。かの醒睡笑にも、「やれ、日本一の鈍なる弟子。」とか、「われは日本一の事をたくみ出いたは。」とか、「紙は日本一の播磨杉原。」とか見えるので、一般の事が推される。

さて足利時代には、獨り日本一のみならず、すべて何々一といふことがはやつたもので、坂東一・四國一・中國一・西塔一、

天和二年　靈元天皇の御代。（一三四二）
元祿　東山天皇の御代。（一三四八―一三六二）

猶進んでは天下一・三國一などの語がある。天下第一の稱は、既に漢籍にも見えてをるのであるが、我が室町時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及び俗文學にも非常に多く使はれてをる稱號である。この稱は大抵、藝術界の優勝者、卽ちチャンピョンといふやうな意味で、一種の尊稱である。從つて俳諧にこの名が甚だ多く見え、月花を愛でるにも、やたらに天下一・天下第一といつたものである。かくの如く流行した結果、餘り亂用し過ぎたので、遂に天和二年に、器物に天下一の字を記すことを禁ぜられた。一體、時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは不都合の至りなのであらう。天和二年といへば、元祿の

天竺　テンヂク。印度の古名。

少し前で、はや大分江戸時代の風潮が變つて來た。これで全く廢れたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が、太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。

天下一に次いでは、三國一といふ語が、やはり同時代に流行したものである。これも始めは廣く用ひられた賞美語であるが、月雪花を愛でたりするほか、最も多くは祝ひ事の場合の祝辭に用ひられた。狂言に秀句好きなるを、「唐土・天竺・我が朝三國に隱れがおりない。」と形容したり、醒睡笑に、「老僧のはたらき三國一。」などと、いつたりする。後世は祝ひ事か、さもなくば甘酒屋の看板に名殘を留めてあつて、現今も天下一などの美稱と共に、國産物などには記してあるのを

折々見うけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば、昔は日本・支那・印度であつたものが、今は露・佛・獨とか、日・英・米とかいふ工合に變つたのだから、右のやうな始末になるのも、あたりまへの話である。

日本一を始め、これらの語は、みな室町時代からの流行語であつたが、時勢の變遷と共に段々廢れてしまつた。まあこれからは世界一といふ語か、さもなくば、「日本で第一。」といふ意味でなく、「日本が第一。」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまい。

（南蠻記）

金田一京助　文學博士。言語學者。東京帝國大學助教授。盛岡市の人。明治十五年生。

大泊　樺太亞庭灣に臨む港市。

一五　言葉の力

金田一京助

樺太の南半分が、三十年振りで日本へ歸つた、その喜びのまだ新たな頃、露艦ノーウィックの巨體が、大泊の港口に坐礁したまゝ、まだその殘骸を半ば波の上に曝らしてゐた頃であつた。

樺太アイヌ語は、北海道アイヌ語とどれ程違ふか。樺太のアイヌは、どんな物の言ひ方をしてゐるか。アイヌ特有の敍事詩が、若しや其處にも傳承されてゐはしないか。今まで抱いてゐたアイヌ語學上の疑問とその解決とが、この方言に照らして、若しや實證することが出來るのではある

まいか。かういふ空想がいつぱいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、たうとう歴史的思ひ出の多いこの新版圖へ、單身踏査の業を思ひ立つに至つたのである。

それは明治四十年の夏のことである。小樽を立つたのは七月の十二日、樺太の奥山には、木立に交つて山櫻がちらちら咲いてゐる頃であつた。大泊に船待をし、毎日濃霧を託ちながらしびれを切らして、やつと米と味噌とを用意して、役所の見巡りの小蒸氣に乘せて貰つて、目指す東海岸へ船出をしたのは十二日目。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩船の上に寢て、二十七日の朝、やつと本船のボートで送られて、オチョポッカのアイヌ部落へ、最初の足跡を印し

小樽　北海道西部小樽灣に臨む港市。

オチョポッカ　富内郡落帆村。

たのである。

併し、思ひに思つてはるゞ訪ねて來たものの、私など、部落の人々に取つては、何處からか迷つて來た犬ころ程の興も惹かない存在だつた。なまじひに、民政署の船に乘つて來た洋服姿などは、役所の看守人ででもあるかのやうな印象をさへ與へて、ともすれば一寸疑深い目を光らせ、私の行く處、立つ處、誰も皆背をむけてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさゞめいてゐた者も笑を收め、寄合つてゐた者も散じてしまふ。その寂しさは譬へやうも無い。皆目言葉が通ぜず、片言隻語も採集出來ずに、空しく一日が暮れてゆくのである。

民政署　明治三十八年軍政の下に設置され、同四十年樺太廳が置かれて廢止された。

役所の船から下りたものだから、居る處だけは、酋長の冬期の住家を、がらんどうに明けて、一人ぽつんと居させてくれるのである。又三度三度の食事は、同じ様に、髪を垂らした入墨の娘が來て、だまつて私の米と味噌とを小鍋へ入れて持去つて、一時間もすると、溫かい飯と汁とを作つて來て、默つて置いて行つてくれる。少しでも物を言ひかけたら最後、ぐん〳〵逃げて行つてしまふ。晝のうちは、まだ繪に描いたやうなアイヌの姿を、眼のあたり見てゐるばかりでも慰めとなつたが、夜になつて、鼻をつまゝれるのも知らないやうな闇の中に、磯うつ浪のざあと退いて行く侘びしい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない寂しさが込みあ

げて、啞の上に盲にさへ生れて來たかのやうな寂寥を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目も亦それを繰返さなければならなかつた。

四日目の事であつた。寂しさは、もはや單なる寂しさではなく、東京を發つて一箇月、遂に何の得る所もなく歸らなければならぬのだらうかといふ不安と憂悶とが頭をかき亂して、茫然として屋外に立つた、丁度その時――ふと見ると、後に子供達が何か喚きながら無心に遊んでゐる。行くともなく、その方へ引寄せられて行つたのは、言葉の一はしでも拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けると、何と

だらう。

いふ發音だらう。しやつくりしながら物言ふやうな喚きやうで、ひと言だつて耳に止まらない。但し子供だけに、私が近く立つても、別して氣にもせず、夢中に囀づて遊んでゐる。ふと、その一人の腰に下つてゐる小刀に觸つて、北海道アイヌ語で「それは何なの。」と訊ねて見た。子供等は一齊に私の顏を見た。と思つたら、一度にわつと囃し立てて、蜘蛛の子を散らすやうに逃げ散つた。「通じないかな。」と獨りつぶやきながら途方に暮れてゐると、又三々五々集つては何か大聲に喚きながら遊ぶのである。又寄つて行つた。今度は言葉を換へて、一人の子の耳に下げた環を指して、「何と言ふものか。」と問うて見た。又振返つて全部の子供が私を

仰いだが「なに云つてやがる。」といつた調子に、「わあ！」と喚いて逃げ出した。

子供等のうちに、繪に見る唐子のやうな著物――多分滿洲方面からの外來品――を著てゐるのが一人あつた。その恰好が一寸面白かつたので、單語を採集する筈の手帳へ、しよう事なしに、その子を寫生し始めた。

私がその子を見ては鉛筆を動かし動かしするのを、目ざとく見つけた子供の一人が、先づ何とか喚いた。他の子も私を見て、又何とか喚いた。遊ぶのを止して、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、まづおづ〳〵と、しやがんでゐる私へ近寄つて來て覗いた。すると他の子も忽ちどや

どややつて來て、みんなで覗いた。年かさのが、唐子の服裝をした子を指して、「お前が描かれたぞ。」とでもいふやうな樣子をした。すると、わい〳〵と言ひだして、私の横から覗くもの、背後から覗くもの、中には無遠慮なのが、指を突きだして、もう私の畫面を突つついて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ。」などと言ふやうに、自分の發見を得意になつて、説明を引受けてゐるのさへある。が、ちつともその言ふ事が聞きとれない。

其の時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめくつて、誰にもすぐ解るやうに、大きく子供の顔を描いて見た。目を二つ竝べて描くと、年かさのが一番先に、「シシ」「シシ」と云つた。他の子も「シシ」、他のも「シシ」、たうとう差覗いてゐた子の口が皆「シシ！」「シシ！」「シシ！」、騒がしいつたらない。その狀は丁度、「目だよ、目なんだよ。」「うん、目だ。」「目だ！目だ！」とでも言ふやうに聞えたのである。

さうだ、北海道アイヌは目をばシクと言ふ。樺太ではそれをシシと言ふかも知れない、といふ事が頭へ閃いた。急いで畫の目から線を横へ引張つて手帳の隅の所へ shish と記入し、それから悠々と鼻を描

アイヌの子供

いていつた。年かさの兒が鋭い聲で、「エトゥプイ！エトゥプイ！」と叫ぶ。と、殘りの兒等も聲々に、「エトゥプイ！エトゥプイ！」。私は可笑しくなつたのを怺へて、又鼻の尖端から線を引いていつて、其の端へ etu-pui と書込んだ。そして口を描いてゆくと、やつぱり年かさの子を眞先に「チャラ！」「チャラ！」と大騒ぎ。眉を描くと、「ラル！」「ラル！」、頭を描くと、「サパ！」「サパ！」、耳を描くと「キサラ、プイ！」「キサラ、プイ！」。

忽ち肢體の名が十數箇、期せずして採集が出來た。可笑しいやら、愉快やら。かうなつたら、もう何でもない。競つて向うから言つて吳れるのだから。

たゞ私は、「何？」といふ一語が欲しくなつた。それさへ解れば、心の儘に、物を指して、その名を聞くことが出來るのである。そこで、ふと思ひついて、もう一枚紙をめくつて、今度は滅茶苦茶な線をぐる〳〵ぐる〳〵引廻した。年かさの兒が首をかしげた。そして「ヘマタ！」と叫んだ。すると他の子供も皆變な顏をして、口々に「ヘマタ！」「ヘマタ！」「ヘマタ！」。

うん！北海道で「何」といふことを、ヘマンダと言ふ。これだと思つたから、まづ試みようと、身のまはりを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやつた。驚くべし、群がる子供らが私の手元へくる〳〵した目を向けて、口々に「スマ！」「スマ！」と呼ぶではないか。北

海道で石のことをシユマといふ。してみると、スマは石のことで、そして、ヘマタはやつぱり「何」といふことに違ひなささうだつたのである。

そこで勇氣を得て、も一つ、足許の草を手に毟り取つて、「ヘマタ？」と高く捧げると、子供達は「ムン！」「ムン！」「ムン！」とぴよんぴよん跳びながら答へる。私は嬉しさに、子供等と一緒にぴよん〳〵跳んで笑つた。

可笑しかつたのは、私が自分の五厘位しかない七八本の顎鬚を摘んで見せて、「ヘマタ？」と訊ねた時である。聲に應じて子供等は「ノホキリ！」「ノホキリ！」と答へてくれたのでNohkiri と記入した。何ぞ知らん、「ノホキリ」は「下顎」だつた。

五厘　尺貫法による一分の半分の長さ。

髯面に馴れてゐるアイヌの子供達の目には、私の摘まんだ鬚などは「鬚」の數に入らなかつたので、私の指は「顎」を摘まんでゐると思つたのである。

私はかうして忽ち、七十四箇の單語を採集して元氣づいた。折から河原に集つて鱒を捕へてゐる大勢の大人達の處へ下りて行つて、覺えたばかりのほや〳〵の單語を勇敢に使つてみた。河原の石を指してはスマと呼び、青草を指してはムン、鱒を見てはヘモイ、鱒の頭を指してはヘモイ-サパ、鱒の目を指してヘモイ-シシ、鱒の口を指してヘモイ-チヤラ！

これまで、むづかしい顏ばかりしてゐた髯面が、もじやも

じやの髯の間から、白い齒を現した。これまでそむけ〳〵してゐた婦女子の顏にも、眞青な入墨の中から白い齒が見えた。明かに皆笑つたのである。中には向うから、網を持つてゐる手を振つて見せて、ヤー（網）と言つたり、砂地を指して、オタ（砂）と言つたりしたものもある。急いで手帳に書きつけながら、その發音を眞似すると、不思議さうに手帳を見に寄つて來るものもあつた。婦女子の群では、「何時覺えたらう。」とか、「よく覺えたもんだ。」とかいふらしい感歎の聲をあげたものもあつた。

かうした間に、私と全舞臺との間を遮つてゐた幕が、いつぺんに切つて落されたのである。さしも越え難かつた禁園の垣根が、はたと私の前に開けたのである。言葉こそ、固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。茲に至つて、私は何物をもためらはず、總てを捨てて驀地（まつしぐら）にこの小徑を進んだ。

一週間の後には、一寸私が首を出しても、右から左から言葉を投げられる。朝起きて河原へ顏を洗ひに、手拭を下げて前を通ると、兩側のアイヌ小屋から、「どこへ行きますか。」「どうしたんですか。」などと、まるで田圃の蝗が飛出すやうにばた〳〵と飛出して來て言葉を懸け、私が旨く答へられたと云つては笑ひ、とんちんかんに答へたと云つては笑ひ、顏を洗つてゐると、もう子供達が起きて後へいつぱいやつて

來てゐる。夜は若い者や年寄りが、さしもがらんどうな私の宿も身動きならない程詰めかけて來て、踊る、歌ふ、喋る。

四十日の滯在の後に、大抵の話は支障なく出來るやうになつた上、樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古謠遺篇三千行の敍事詩の採錄を家苞に、私は、生涯忘れがたい思を殘して、この部落の老若に別を告げた。

（北の人）

高山樗牛
名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿。年三十二。

日蓮上人
日蓮宗の開祖。安房（千葉縣）の人。弘安五年歿。年六十一。（一八八二—一九四二）

法華經
妙法蓮華經の略稱。支那・日本を通じて最も弘く流布した經典の一。

悔いじ

一六　日蓮上人の人格

高山樗牛

高山樗牛

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歷史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るとも驚かず、法華經の爲ならば此の頭を刎ねらるゝとも悔いじと覺悟し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しか

四條金吾
名は賴基。
江馬遠江守
名は光時。

不レ惜ニ身命ヲ。

龍口
神奈川縣鎌倉郡に在る。

りしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今、左に一二の例を擧ぐべし。

日蓮上人辻説法　野田九浦筆

上人の信者に、四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共に諸々の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に

島二つ
壹岐と對馬。

馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に現ずべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れたり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、

身延山　山梨縣南巨摩郡に在る。

池上　東京市大森區池上町。日蓮入寂の地。

檀越　ダンヲチ。

波木井氏　南部實長の事。甲斐の國（山梨縣）の人。

五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀登りて、遙かに上人の故鄕なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談ありや。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附け候ては覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。」と、しるされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は、人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し、融會して、こゝに豪傑の全人格をつくるなり。かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る糸卽ち刺を織る糸なるにあらずや。

（樗牛全集）

一七　我が文化の將來

田中寛一

田中寛一　文學博士。東京文理科大學教授。明治十三年生。岡山縣の人。

日本文明の發達の跡を顧みれば、常に外國文明を取入れて之を日本化して來た。即ち、印度に起つた佛教を取入れて益〻發展せしめ、今なほ之を保存して居る。支那から儒教を輸入して、これ又その思想をとつて自己のものとし、加ふるに國字を案出して國文學を起した。キリスト教は遙か後に輸入されたが、漸次日本化しようとして居る。しかして、現代は科學を輸入して之を利用する時期が到來しつゝある。見來れば皆外國文明の摸倣のやうであるが、純粹の摸倣ではない。摸倣しては自分のものを作つたのである。

或は少くとも之を體得した。佛教も儒教も、その發祥地に滅びて、日本にのみ殘つたのである。更に考へるに、過去に於ける日本では、優良なる素質を有するものが、戰術と宗教との方面に集つた爲に、他の文化的事業に於て貧弱であつた感がある。然るに今や偉才はあらゆる方面に向つて居るから、若しも我等及び我等の子孫が、先輩によつて示された模範に倣つて、努力を續けて行つたならば、必ずや近い將來に東西の兩文明は、日本民族によつて渾然たる一體に融合せしめられ、古今未曾有の大文明が、東京を中心として起るであらう。その理由の主なるものは、

一、西洋文明は分析的であるから、之を學習することが

容易である。之に反して、日本の文明は綜合的であるから、歐米人が日本の文明を理解することは、日本人が西洋文明を體得する樣に容易には行かない。しかして日本民族は、この比較的、學習に困難な方面を先づ發展せしめ、更に西洋文明を輸入して居るから、兩種の文明を融合するに最も好都合な立場にある。今日までの日本民族は、國語を學習する負擔の上に、更に外國語を學習する爲に、二重の重荷に苦しんで來たが、その努力は今や漸く酬いられようとして居るのである。

二、二つの高い文明を融合したものは、その一つのものを發達せしめたものよりも、一層高い文明である。此の意味に於て、東西兩文明の長所を採つて融合したものは、古今未曾有の最高文明である。

三、先進國は、天產物が豐富である上に、自然科學の知識を極力應用して居るから、所謂文明の弊を早くから受けて居る。しかして、今やその弊に耐へられない情勢を呈しつつある。文明の弊の中で最も重大なのは、歡樂を追求して物質過重主義になることと、種々の原因によつて出產率の減少することとである。

四、日本の位置は、東西兩文明の接觸點として最も重要な地位を占めて居り、その氣候は文明の發達に適して居ることである。

ルーズヴェルト　米國の政治家。第二十六代大統領。（一八五八―一九一九）

ルーズヴェルトは曾て次のやうにいつた。曰く、「昔、羅馬帝國の衰亡と共に、地中海時代は終りを告げた。大西洋文明の時代は目下その絶頂にあるが、これまた遠からず資源の枯渇を見るに至るであらう。しかしてこれに代るものは、實に太平洋時代である。惟ふに太平洋時代は、前記三時代中、最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容して一團となすものであるから。抑〻人類は、次第に西へ西へと移住を行ふもので、その結果遂に地球を一周して、今やアメリカの西部の人々は、太平洋を中央にして、アジア大陸在來の人種と相對立して居る。米國人の運命は、右人類の新運動に伴なふ難關の第一線に立つものである。」と。

太平洋時代は既に到來した。しかしてこゝに大文明の起るべき機會に遭逢した譯である。日本民族の使命は、實に重大である。而して日本民族は、この重大使命を遂行するに十分な心身の力と、適當な氣候とに惠まれて居るのである。

日本民族の前途は、洋々として希望に滿ちてゐる。しかもそれは、可能性を有つ。この可能性を實現する爲には、我が民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して、單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を摸倣するだけでは得られるものでなく、日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られ

フイエ　フランスの哲學者。（一八三八―一九一二）

アングローサクソン　第五世紀の頃獨逸の北西部からイギリスの地に入り、今日のイギリス人の主な祖先となつた種族。

ラテン　民族の名。歐洲西南部に多く、文藝・美術の技に長ずる。イタリヤ・フランス・イスパニヤ・ポルトガル等の民族はこれに屬する。

る。

フイエは、歐洲各民族について考察し、最後に結論として、

「未來はアングローサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又、ラテン人のものでもない。最も聰明で勤勉、且最も道德的のものの掌中に歸すべきである。」

と云つてゐる。日本民族の將來を思ふ者は、當にこの至言を服膺すべきである。

（日本民族の將來）

さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ

（本居宣長）

一八　春を迎ふ

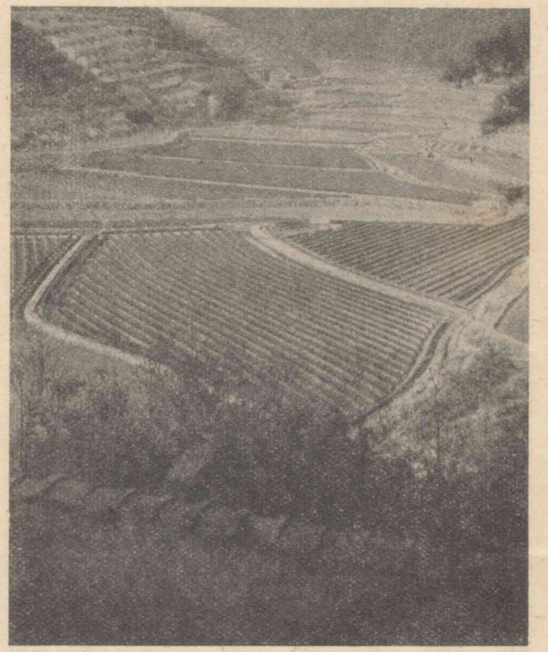
編者

曆面では二月上旬に既に立春を迎へたけれども、寒氣はなほ凜烈で、朝早く星を戴いて出る日などは、鋭い風が膚を刺すばかりであつた。雪も日を隔てて降り繼いだが、さすがに度重なるにつれて、漸く融けるのが早くなつて行つた。日中はほつかりと日が當つて、屋根から雪解の水が軒を傳つて落ちて止まない。眺めてゐると、珠玉となつては横に走つて落ちる。軒の玉水とはよく云つたものである。

凍つてゐた大地が柔かくなり、冬枯の木の枝がほぐれて來る。南枝まづ綻び初むる梅は、衆花に先だつて、春の來た

疎影横斜水清淺
林和靖の詩の一句。まばらな梅樹のかげが清い水に映つたさま。

ことを確實に告げる。梅は樹影を賞する。「疎影横斜水清淺」の趣は、他樹の遠く及び難いところであるが、新柳も亦、水を得て風情益々佳なるを覺える。



早春

冬の間、眠つてゐた泉も、生命を恢復して、生き〳〵して來た。落葉や枯枝を押流さうとして、水は其處に力を集中する。遂には目的を達し、淙々と音を立てながら威勢よく石を洗つて流れる。またひとり、かやうなせゝらぎ、いさら小川のみではない。流れ集つて大河となつては、

春の水山なき國を流れけり

の句の如き、洋々たる趣を見せるのである。

春は流動し、夏は湛へ溢れ、秋は澄み、冬は凝結する。水だけでは無い。あらゆる物がかやうに感じられる。春は木の芽が萌るといふ義である。今までじつと縮まつて堪へてゐた生命が、自然の緩みを得て流れ出すのである。

古語に「生く」と「足る」とを以て、事物を稱讃する云ひ方がある。例へば「生く日の足る日」「生く國足る國」の如きである。「生く」とは潑剌として生色あるを謂ひ、「足る」とは豐滿にして

生く日の足る日
祝詞に、祭日をほめていふ語。生々として萬に事足る日の意。
生く國、足る國

連翹　レンゲウ。木犀科に屬する落葉灌木。

在りとしも

充實せるを謂ふ。この「生く」こそは、早春を象徴する語としても實に適切であると思ふ。

梅に續いて咲出る花が待遠しい。櫻は國花、賞すべく貴むべきである。椿・馬醉木にはすぐれた古歌が多く想起せられ、藤・山吹には逝く春が惜しまれよう。桃・李・紅梅・海棠・木蘭・連翹等、支那趣味の花の多いのも賑はしい。柳に後れて芽ぐみ來る新葉が期待される。樹葉は空林に煙の如く萌初めたのが、亦と無く活氣を覺える。

闇の夜空に、在りとしも見えなかつた四方の山々の姿が、裾から段々浮き出して來る。風無き夜に火を放つて山を燒くのである。火は裾一面に山を包んで、上へ〳〵と燃昇り、山頂の一本松さへ夜空に煙つて眺められる。野山を燒いた跡には、微雨を待ちつけて、蕨が今にも頭を擡げるであらう。

黄鳥の聲に誘はれて、屋後の岡に登れば、思の外に麥は青み百蟲は蠢いてゐる。江山一帶の煙霞に對し、揚雲雀の聲を聞きながら、冬蟄の啓けたことを喜んだ。世は正に春である。菜根を咬んで裏畑の土を耕し、以て我が家の食味を賑はしたいと思ふ。

菜根云々　菜根は粗末な食物。此の句は、「菜根を咬み得ば、百事做すべし。」といふ呂氏師友雜志の語による。

一九　昭和日本

徳富蘇峰

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のことあり。異國には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とは、北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり。

今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき寶祚を嗣がせ給ふ。吾人草莽の小民、恭しくこゝに忠良至純なる帝國臣民の誠意と赤心とを披瀝して、一片の頌辭を奉る。

謹んで按ずるに、皇室典範第十條に曰く、

徳富蘇峰　名は猪一郎。評論家。貴族院議員。帝國學士院會員。熊本縣の人。文久二年生。

日神　天照大神を申し奉る。

北畠親房　吉野朝の忠臣。正平九年歿。年六十三。（一九五二―二〇一四）

神皇正統記　神代から後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたもの。三卷。親房の著。

天壤と共に　日本書紀に、「豐葦原ノ千五百秋之瑞穗國是吾子孫可レ王之地。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當下與二天壤一無上レ窮者矣。」とある。

皇室典範　皇位の繼承等について規定せられた法典。

天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

と。神器とは鏡・劍・璽の三種の神器を云ふ。此の神器の皇位の御守たることは、國史の上に昭乎として天日の如く瞭かなり。

蓋し天子の位、一日も曠しくすべからずとは、歷世の宣命にも明記せられたる所なり。國家の變故に際する每に、帝國の舊章・古典は、恆に吾人の指導者たり。今や親しく其の實物教訓に接す。吾人臣民は自ら顧みて、悠久なる歷史を持つ日本帝國の臣民たることを、無上の幸運にして且光榮たりと感激す。

恭しく惟みるに、今上天皇陛下には、天資聰明、仁孝の德、蚤

に天下に治し。攝政として先帝に代り、庶政を總べ、百揆を攬り、其の御經驗や頗る多大なり。而して皇太子として世界を周遊あらせられたる如きは、國史上未曾有のことたり。吾人臣民は、洵に陛下の統治の下に、其の生を享け、其の業に就き、其の志を遂げ、其の務を果すことを得るを以て、比類なき福祉とし、冥加と感佩す。

皇政維新の大改革以來、既に六十年を經過せり。而して帝國の國運は、世界の變遷と與に勢ひ變遷せざるを得ざるものあり。特に世界大戰以來、世界に於ける無比の大國たる露、無比の强國たる獨、無比の舊國たる墺の三大帝國は、其の國命を革め、而して其の以前、東洋に於ける一大帝國たり

宣統帝　清朝最後の皇帝。西暦一九一二年退位。現滿洲國皇帝陛下。

し清國も亦、宣統帝位を去りて、中華民國となりぬ。今や世界の中に於て、帝國の名實兩つながら全くして、巍然として列國の表に聳立するものは、東洋に於て大日本帝國あり、西洋に於て稍これに庶幾きもの、大英帝國あるのみ。

世界大戰の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず。一天四海、看來れば、大風雨大洪水の後たらずんば、大火事の後たり。此の間に介在して善處せんとす。我が大日本帝國の前途も亦難いかな。

而も其の無秩序は、單に形而下の事のみならず。今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も

亦、其の驚波駭浪の中に立てり。物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は、猶更不可能とする所にして、此の一大混亂期に際する吾人の覺悟としては、徒に外來の惡思想、惡傾向を防止するにあらずして、我自ら我が固有の本領を發揮せざるべからざるにあり。所謂彼の惡を禁ずるにあらずして、我の善を奬むるにあらずんばあるべからず。而して其の善思想・善傾向の泉源は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を致さざるべからず。

我が國民の忠良なることは、國史の證明する所なり。而もこれ國民が獨り自ら忠良なるにあらずして、我が皇室の

太平記　四十卷。戰記物語の一。花園天皇から後村上天皇に至る凡そ五十年間の歴史。

恩德、よく國民の思想を涵養し、育化し、其の性情を感發し、興起せしめて、こゝに至らしめたるなり。

如何なる場合にも除外例はあり。若し仔細に國史を探求せんか、我が國民の少くとも或部分に於ては、其の忠良性を失墜したる場合、決して皆無にはあらず。一部の太平記を披きても、如何に我が國民の或者が、脫線的言動を逞しうしたりしかを知るべし。若し徒に國民の忠良性に依賴し、これを培育し、これを補充し、これを長養せしむる所以の道を竭さざるに於ては、其の極、或は寒心すべき結果を來さざるとも限らず。此の一義は、須臾も忘るべからざる要件にして、殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす。

今日は國家多難の秋なり。如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも、我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつゝある實狀を看過する能はず。吾人臣民は、かゝる多難の時に際し、至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて、深く宸慮を惱まさせ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり。而も我が國民は、悉く皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚賢不肖を問はず、皆奬順せざる者なし。今日の急務は、たゞ至尊の乾德天の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す。而して、これ實に明治天皇の、振古未曾有の皇運を恢弘あらせ給ひたる所以なりしなり。恐れながら新政の典型は、一にこれに基づかざるべからず。

抑〻神武天皇の業を創め給ふや、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲すの大規模を建てさせ給ひぬ。明治天皇の御代を知ろしめすや、首めに五箇條の御誓文を立て給ひ、

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ン
トス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

と宣へり。而して天皇は、實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否、御言葉以上に行はせ給ひぬ。

日本帝國臣民の尊皇心は、明治の御代、殊に其の末期に至

りて、最も深厚、熱烈に發揮せられたり。而してこれ國民の忠良心が、偶然に勃興し、一時に突發したるにあらずして、實に我が明治天皇の盛德の、國民を感化し、知らず、覺えず、こゝに至らしめたるものなりしなり。次いで大正の御代は、實に其の聖澤の中より出で、先帝よくこれを守らせ給ひしによりて、彌〻隆運を成ししものと信ず。

草莽の微臣、此の國家の大事に際し、感迫り、情熱し、自ら裁する所以を知らず。たゞ恭しく滿腔の赤誠を披瀝して、天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歳を頌し奉るのみ。而してこれ實に我が帝國の忠良なる臣民の、心底より出で來りたる至誠の祈願なり。

（昭和一新論）

補習文

一　東海道の歌

編者

東海道の旅といへば、昔から一番往來のしげきところ、今日では鐵道によることとなつて、その線路は昔日の街道と多少道の違ふところもあるが、やはり旅客が多く、最もよく世に知られてゐるから、ここにこの日本國の大通ともいふべき東海道で詠まれた古人の歌に就いて話して見よう。

汽車が東京を離れてから、先づ大きな都會は横濱である。横濱は、維新近くまでは唯の漁村に過ぎなかつた所であるから、勿論古く歌に詠まれる筈はない。しかし、こゝに面白い歌が一つあるか

ペリー　米國の提督。嘉永六年米國の使節として我が國に來て開國通商を請ひ、安政元年再び來訪して和親條約を結んだ。（一七九四―一八五八）

ら、それを紹介しよう。

日のもとのあづまのみやこを志して使に參りし頃、武藏の國横濱の浦といふ所に、船の碇をおろして日數經るほどに、おの〳〵旅のつれ〴〵慰めむとて、船の上につどひゐて、酒のみ遊びけるに、日も暮れて月のいとおもしろうさし出でたりければ、戯れにその國のしらべをうたふ。

彼　理

むさしの海さし出づる月は天飛ぶやかりほるにやに殘る影かも

「彼理」といふのはペリーの事である。勿論これは、ペリーの作ではない。幕末の偉人佐久間象山の戯作である。「天とぶや雁」といふ萬葉集の歌に用ひてある枕詞を、そのまゝカリフォルニヤにか

狩野芳崖　畫家。明治二十一年歿。年六十一。

廣重　安藤氏。江戸末期の浮世繪師。安政五年歿。年六十二。（一七九四―一八五八）

木の間木の間に云々　「富士の嶺を木の間木の間にかへり見て松の蔭ふむ浮島が原。」とあるによる。

けて使つたのは、機智に富んでゐて、この作者の歌にもすぐれてゐたことが知られる。

丹那トンネルを通過して沼津に近づけば、視界の焦點は、どうしても東海の靈山たる富士山の上に注がれる。富士山を詠んだ歌は、萬葉集以來數々あるが、その中に、明治畫壇の巨匠狩野芳崖の作に、

うつくしくあやにたへなりかしこくも神のつくれる我が
おほみ山

といふのがある。さすがに畫家の詠だけに、感じが違つてゐる。笠をかぶつた昔の旅人が、富士の眞下なる松並木のかげを、富士をかへりみがちにゆく姿は、まさしく廣重の畫である。香川景樹の有名な「木の間木の間にかへり見て」の歌も思ひ出される。少しす

すむともう興津である。この邊は、東海道中でも、風景絶佳の地であつて、昔から旅人はこゝで心を引きとめられる。

庵原の清見がさきにあさ晴れて富士は秋こそ見るべかりけれ　上田秋成

明朗高潔なる富士山が、澄切つた空に聳えてゐる景は、實に秋がよい。

庵原　イホハラ。現今はイハラとよぶ。靜岡縣庵原郡。

靜岡を過ぎて、やがて宇津の山にかゝる。この峠は、今こそ何分とかゝらずに隧道を拔終るけれども、昔時にあつては相當に骨の折れる峠であつた。

宇津の山　靜岡縣安倍・志太兩郡の境にある山。宇津谷峠といふ。

汽車は遠江にさし懸る。このあたりは丘陵がうち續いてのびてゐる。その間をかけ拔けてゆくと、忽ち天龍川である。一走りすると、もう濱名湖である。

遠江　靜岡縣の一部をなす國名。

旅にして誰にかたらむとほつあふみいなさ細江のはるのあけぼの　香川景樹

かのわたりを引佐郡といひ、湖岸にいくつもの細い入江があるので、いなさ細江と古くからいはれてをる。この細江は今では藺の名產地となつてをる。

引佐　イナサ。

名古屋を過ぎて幾程も無く汽車は岐阜に著く。この市の北を流れるのは長良川である。この川は昔から鵜飼に依つて知られてゐる。暗い夜に篝火を焚いて流に沿うて下つて來る鵜舟の哀趣は、芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」の一句に盡きてゐる。歌では、香川景樹に、

雨は止み雲まだ霽れぬ夕やみの空まちいでてさす鵜舟かな

俊成　藤原俊成。歌人。千載和歌集の撰者。元久元年歿。年九十一。（一七七四―一八六四）

平忠度　武將。忠盛の子。壽永三年歿。年四十一。（一八〇四―一八四四）

さゝなみや云々　千載和歌集にある。

の作がある。

琵琶湖を車窓の右に眺めつゝ行くと、早くも大津に來る。長等山が見える。平家の都落の際、夜にまぎれて五條三位俊成の門をたゝいて、歌稿を託したといふ平忠度の歌は、謠曲の題材ともなつてをる。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらのやまざくらかな

そのかみの街道のさまを思はせる歌に、

雨ふれば泥ふみなづむ大津みちわれに馬ありめさねたびびと　井手曙覽

といふのがある。馬方のいうた詞を其のまゝ歌にしたのである。又、この邊は車をひく牛が多かつたので、それを見て大隈言道のよんだ面白い歌がある。

初に來て大津の大路けふみればよくも牛にはうまれざりけり

汽車は逢坂山を拔けてやがて京都に入る。京都は平安京として文化の淵叢の地であつたから、こゝで詠まれた歌の數は限りもない。しかし京都市中で誰もが第一に京都らしく感じるのは、あの賀茂川の流であらう。

逢坂山　滋賀縣滋賀郡にある。

かへるべく夜はふけたれど賀茂川の瀨の音はたかく月はさやけし

是も香川景樹の歌であるが、あの柳のゆらぐ岸のほとり、瀨の音の清い河原は、如何にも京らしい感じをそゝる。その川の邊り近く歩みを運ぶと、川瀨の音に旅の疲れも心地よく治まるであらう。

森鷗外
名は林太郎。醫學博士・文學博士。陸軍軍醫總監。帝室博物館長。大正十一年歿。年六十一。

二　曾我兄弟

森　鷗外

幕の外。

十郎・五郎登場。續松を把る。

十郎　こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。待ちに待つた當の敵、左衞門尉は言ふに及ばず、出逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女ばらも數多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎　仰しやるまでもござらぬ。

十郎　いざ。

五郎　いざ。

（二人幕を褰げて入る）

妹尾太郎兼康、平家の士。

いしくも　よくも。

板戸をさしたる假屋の縁の前。

（大藤内、板戸を蹴放ちて登場。十郎・五郎、續きて登場）

大藤内　お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎　何を。

（十郎・大藤内を一刀切る。大藤内、俯臥になる。五郎、腰を切放す）

十郎　（笑ふ）こやつ、平家の世盛りには、妹尾に附いて榮をもとめ、その罰に召放された領地を、又工藤の手で取返しをつた。世渡り上手奴。四這ひに這うて世を渡れ。

（十郎・五郎共に笑ふ）

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎　さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎　やあ、假屋の人々。

かねて音にも聞きつらん。

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成。

五郎　同じく五郎時致、只今假屋の内に於て父の敵工藤左衛門祐經を討取つたり。

十郎　我と思はん人々は、疾う〳〵こゝにいで合ひて、

二人　御討留め候へ。

（二人暫く屏息して物音を聞く）

五郎　誰も出ぬではござらぬか。

十郎　無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。五郎まゐれ。

無下のもの　極めていやしいもの。

將軍家の屋形。蔀の外、板縁。雨。五郎登場。

五郎　兄上。兄上。

仁田（にた）の聲（舞臺の背後にて）やあ、假屋の人々承れ。狼藉者の一人祐成は、伊豆の國人仁田四郎忠常が討取つたり。

鬨の聲（同上）えい、おう。

五郎　はつ。兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父樣を自滅させ、敵工藤を鼎屑せられた將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。

（五郎、縁に登る。五郎丸、被衣（かつぎ）を被り、すれ違ひ、被衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く。五郎板縁をふみ拔く。二人無言にて揉合ふ）幕

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏がゐる。

（雜色登場）

雜色　只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色登場。五郎登場。大見小平太實政、繩を取る。狩野、座を進む）

狩野　曾我の五郎承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい

五郎　（怒る）だまれ狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野　怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それを彼此申すのは、まだ君に楯つく所存か。

落魄　慣用音ラクハク。おちぶれること。

武智麿　藤原不比等の子。藤原南家の祖。

賴朝の聲（簾の内より）いや、待て、狩野・新開。曾我の五郎が申す條、尤もなれば、賴朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半ば捲く。賴朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開、中央に殘る）

五郎　（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍　新開、退いて遣はせ。

新開　はあ。（新開退く）

將軍　見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてゐる。誰かある。曾我の五郎に敷皮を取らせい。

卒　はあ。（卒、右手より敷皮を持出でて敷く）

五郎　此の敷皮を見るにつけ、

平相國親子　平清盛及び其の子宗盛をさす。
怨毒　エンドク。うらんで他を害すること。
讒舌　ザンセツ。きかしらぐち。

十年の昔ぞしのばるゝ。
年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた、小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、
兄一萬は十二歳
此の箱王は十の時、
由比が濱邊に伴なはれ、
引据ゑられし敷皮は
夢見ごこちに春を待つ
莟を摧きし悲涙の座。
今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思

往返　ワウヘン。往復と同じ。

ひ置くことなければ、有難く拜領いたす。（敷く）

將軍　殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思ひ立ちか。

五郎　それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍　然らば、伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎　いかにも其の往返には心を附け、足柄・箱根・大磯・小磯・由比・小坪の邊に佇み、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

狼藉　ラウゼキ。無法な所行。

將軍　ふん。さもあらう。さて工藤は父の仇ゆゑ仔細はないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎　固より我等兄弟はかゝる狼藉を企てたからは、刃向ふものあらん限り、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまでござる。

將軍　して、大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは、恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、今はなか〳〵不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎　これは憚りある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍

伊東次郎　名は祐親。祐家の子。治承四年（一八四〇）自殺。

三浦　名は義澄。義明の第二子。正治二年（一八六〇）歿。年七十四。

家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅いたいた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おう。よう藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。

五郎　さやうなものは一人もござらぬ。

將軍　さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎　こは仰せとも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに行けと申す親のござらうや。

將軍　おう。一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）はあ、四郎忠常、只今それへ。

（仁田、首桶を持ち登場）

仁田　仰せによつて、曾我の十郎が首級これに持參致いてござる。

將軍　五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（大見、五郎の繩を解く）

仁田　實驗の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。（首桶を開く）

五郎　なつかしや、兄上。

　　點し列ねし松の火の

　　消えなば共にと思ひしに、

　　不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合せたら。

仁田　いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刃はぽつきと鍔元から。

五郎　なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田　おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かられたか。

（五郎歎く。犬房丸、鞭を持ち、走り出づ）

犬房　父上の敵思ひ知れ。（五郎を鞭うつ）

五郎　や、この小童は何者ぢや。（五郎睨む。犬房たじろぐ）

仁田　犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎　なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子穉くて
親を討たれし悲は
いかでか我に異ならん。
果報の縄に引かれずば、
刃を取りて立向かひ、
御身に討たれん我が身なり。

稚くて　ワカナくて。

犬房　刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ其の笞で打つてくれい。
父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎　おう。さうか。さあ、につくい小わつぱ打たれるなら打つて見い。

犬房　なんの打たいで。おのれが、おのれが。（連打す）

将軍　もうよい、よい。犬房、それで堪忍いたせ。

犬房　はつ。（鞭を棄てて平伏す）

将軍　五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや志を飜して奉公致してくれまいか。

五郎　それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。一しよに死なうと誓うた兄を久しう待たせるも心苦しい。首刎

閫外の職　コングワイのシヨク。将軍の職をいふ。史記に、「上古王者之遣レ将也、跪而推レ轂曰、閫以内者寡人制レ之、閫以外者将軍制レ之。」とある。

行住　ギヤウヂユウ。行くことと、とどまること。ふだん。

ねられるを待つ外ござらぬ。（天見に）さあ繩を打たれい。

大見　いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預り、君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍　待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎　（居直る）こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領致さう。

將軍　（起つ）わが打つ繩は不動の羂索、難伏のそちにはふさはしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす。幕。）

（鷗外全集）

不動の羂索　フドウのケンサク。不動明王の持つわな。

難伏　ナンブク。

常用漢字表

（一）本表ニナイ漢字ハ假名デ書ク。
（二）固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用ヒテモ差支ナイ。タヾシ外國（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ假名書トスルコト。
（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞オヨビ助詞ハナルベク假名デ書ク。
（四）外來語ハ假名デ書ク。

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久之乏乘【乙】乙九乞也乳乱(亂)【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交亦京亭【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使来(來)例侍供佳依侮侯侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸併(併)倉個倍倒候借倫倶仮(假)偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞(僞)僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光兌克免児(兒)

【入】入内全両(兩)【八】八公六共兵具典其兼【冂】冊再【冫】冬冷凉准凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺剌(刻)則削前剛副割創剰(剩)劇劍剤(劑)【力】力功加劣助努效勅勇勉動勘務勝労(勞)募勢勤勳励(勵)勧(勸)【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厥【厶】去参(參)【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品咸員哲唐唱商問啓唯善喉喜喪單喫嗣嘉器噴嚴嚥(嚥)【囗】囚四回因困固国(國)囲(圍)園囚(圓)図(圖)團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓墜(墜)墳墨墮壁壇壓壞(壞)【士】士壮壱(壹)壽(壽)【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妥妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦娼婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫学(學)【宀】冗(穴)宅守安完宏宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢実(實)審写(寫)寛宝(寶)【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬(屬)【山】山岡岩岳岸峠峯島峡崇崎崩【巛】川州巡巣【工】工左巧巨差【己】己【巾】市布帆希帝帥師席帳帶(帶)常帽幅幕幣【干】干平年幸幹【幺】

幻幼幾【广】床序底店府度座庫庭庶康廉廊廢(廢)廣廳(廳)【廴】延廷建廻【廾】弄弊【弋】式【弓】弓弔引弟弱張强彈【彡】形彩彫彰影【彳】役彼往征待律後徐径(徑)徒(徒)得從(從)御復微徵德徹【心】心必忌忍志忘忙忠快念怒思怠急性怨怪怯恐恥恨恩恭息悔悟患悖悲悼情惑惜惠惡惟惰惱(惱)想愁愉意愚愛感慈態慕慘(慘)慢慣慨慮慰慶慾憂慎憐憚憲憶憾憤懇應懲懷懸恋(戀)【戈】戚我戒戰戲(戲)戴【戶】戶戾房所扇【手】手才打扱扶批承技抑投抗折抱抵押抽拂拍拒拓拔拘拙招披拜括拳拾持指振捕捧捨掃授掌排掛採探扣(控)推接提揚換握揭揮援描插損搖搜摘携摩撫択(擇)擊操担(擔)拠(據)擬擴摂(攝)【支】支【攴】收改攻放政故叙(敍)敎敏救敗敢散敬敵敷数(數)整【文】文【斗】斗料斜【斤】斤斥斬斯新断(斷)【方】方施旅施族旗【无】既【日】日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昨是映昭時晩晝普景晴晶智暇暖暗暑暮暴曆曇曜【曰】曲更書曹會替最會【月】月有朋服朕朗望朝期【木】木未本札朱机朽杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝枯架柄某染柔査柩柱柳栗校株根格栽桃桑桃桑梅条(條)梨械棄楕棒棟森棺植楠業極栄(榮)構概楽(樂)楼(樓)標樞極様(様)樹橋機横檄檢櫻欄権(權)【欠】次欲款欺歌歎歐歡(歡)【止】止正此歩武歳歴帰(歸)【歹】死殊殉殖残(殘)【殳】殿殺殿毀【毋】母毎毒【比】比【毛】毛【氏】氏民【气】気(氣)【水】水氷永汁求汗汚江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津洪活派流浦浪浮浴海浸消渉液淑涙淡淨淫深混清浅(淺)添減渡溫測港渇湖湧湯渕(淵)源準溢溶溺滅滋滑滯(滯)滴満(滿)漁漂漆漏演漠漢漫漸潔潜(潛)潮沢(澤)激濁濃湿(濕)済(濟)濱滝(瀧)灣(灣)【火】火灰炎炊炭烈無然煉煮煙照煩熟熱燃燈燒營(營)爆炉(爐)【爪】爪爭為(爲)爵【父】父【爻】爾【片】片版牌【牙】牙【牛】牛牧物牲特犠(犠)【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫猶獄独(獨)獲猟(獵)獸献(獻)【玄】玄率【玉】玉王玩珍珠班現球理琴環璽【瓦】瓦瓶(瓶)【甘】甘甚【生】生産甥【用】用【田】田由甲申男町界畏畑畜畝略番画(畫)異畳(留)當畳(疊)【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾病症痘痛痢療癖【癶】登発(發)【白】白百的皆皇【皮】皮【皿】皿盆益盛盜盟尽(盡)監盤【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢知短【石】石砂砲破研(研)硬硯碁碎碑確磁磨礎【示】示社祈祕祖祝神票祭禁禍福禦礼(禮)【禾】秀私秋科秒租秩移税程稚種称(稱)稲稿穀積穂穩【穴】穴究空突窃窒窓(窓)窮【立】立章童端競【竹】竹竿笑笛符第筆等筋筒答策算管箱節範築篤簡簿籍【米】米粉粒粘粗粹精糖糞【糸】系紀約紅紋納純級紛素紡索紫累細紳紹紺終組結絶絡給統糸(絲)絹経(經)絲維綱網綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛縣縫縮縱(縱)総(總)績繁織繕繪繭繰継(繼)続(續)【缶】欠(缺)【网】罪置署罰罵罷羅【羊】羊美羞義【羽】羽翁翌習翼【老】老考者【而】耐【耒】耕【耳】耳聖聞聯聲(聲)職聽(聽)【聿】肅(肅)肇【肉】肉肖肝股肥肩育肺胃背胎胞胴胸能脈脊脅脚脫腐腕腦(腦)腰腸腹膚膜膝胆(膽)臆膺臓【臣】臣臥臨【自】自臭【至】至致台(臺)【臼】與興挙(擧)旧(舊)【舌】舌舎【舛】舞【舟】舟航般舵舶船艦【艮】良【色】色【艸】芝花芽芳苑苗若苦英茂茶草荒荷莊菊菌菓栄華万(萬)落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄藏藝藤薬(藥)【虍】虎虐処(處)虚(虛)号(號)【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融虫(蟲)蚕(蠶)蛮(蠻)【血】血衆【行】行術街衝衡衛【衣】衣表衰袋袖被裁裂裏裕補裝裸製複褒襲【西】西要覆【見】見規視親覚(覺)覧観(觀)【角】角解(解)触(觸)【言】言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠試詩詰話詳誇誇誌認誓誕語誠誤說課調談請論諭諸諾謀謁講謝謠謹謬証(證)識譜警訳(譯)議護誉(譽)読(讀)変(變)讓【谷】谷【豆】豆豊(豐)【豕】豚象豪豫【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤(賤)賦質賴購贈賛(贊)【赤】赤【走】走(走)赴起超越趣【足】距跡路踊躍【身】身【車】車軌軍軒軟軸較載軽(輕)輩輪輸輯輿轉【辛】辛弁(辨辯)辞(辭)【辰】辰農【辵】辻迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途通速造連週進逸遂遇遊運過道達違遙遜(遜)遠遣適遭遲(遲)遷選遺遵避還辺(邊)【邑】邦邪邸郊郎郡部郵都鄭【酉】酌配酒酢酬酷酸醉醜医(醫)【釆】釈(釋)【里】里重野量【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錄錢(錢)錯鍋鎖鎮鏡鑄(鑄)鐘鉄(鐵)鑑鑛【長】長【門】門閉開閑間閣閲関(關)【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔隙際障隣随(隨)險隱【隹】隻雀雄雅集雇雌双

(雙)雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈(靈)
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頓預頑領頭頻題額
顔願顚類顧顯(顯)【風】

風【飛】飛翻【食】食飢飲
飯飾養餓余(餘)餐餅(餅)
館(館)【首】首【香】香
【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒
驅驗驚駅(驛)【骨】骨髄
(髓)体(體)【高】高【髟】

髮【鬥】鬪(鬪)【鬼】鬼魂
魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】鳥
鳩鳴鶴鷄【鹵】塩(鹽)【鹿】
麁(鹿)麗(麗)【麥】麦(麥)
【麻】麻【黃】黄【黑】黑
默点(點)党(黨)【鼓】鼓

【鼻】鼻【齊】斎(齋)【齒】
歯(齒)齢(齡)【龍】竜(龍)
【龜】亀(龜)

『注意』本表ニオイテハ(　)印ヲ附シタ原字ヲ捨テ、コレニ對スル簡易字體ヲ一般ニ採用スル積デアル。

昭和十三年一月二十一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

昭和十二年七月十五日印刷
昭和十二年七月二十日發行
昭和十二年十一月廿三日訂正再版印刷
昭和十二年十二月廿五日訂正再版發行

新制國語讀本（全十册）
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　東京市神田區錦町二丁目七番地　湯川松次郎
印刷者　大阪市西區幸町通二丁目三番地　岩岡忠一

發行所　東京市神田區錦町二丁目七番地
大阪市南區順慶町通一丁目五十三番地
湯川弘文社

陵中

二ノ一

[redacted]

[redacted]

[redacted]

考有